

翻刻 名古屋市蓬左文庫藏「幸若音曲本」(二)

—兵庫・はま出・清重・俊寛・新曲・やしま—

服部 幸造

(承) 翻刻 名古屋市蓬左文庫藏「幸若音曲本」(一) —夜討曾我・

信田・十番切・大臣— (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要

第9号 二〇〇〇年十一月)

(兵庫)

中むかしの事かよその比平家の太将をは。あきのかみ清盛と申奉る。御出家有てのかいみやうを浄海とこそ申けれ。御一もんれんさの所にての給ひけるは。それ人のよにあるしには。大願をおこし。あるひは国をあらため。里山広野を名所となし。たみすなをなるまつりごとを末代のかたみとするなり。天下のしきしきやうをわかまゝにふるまふとはいへど。平安城のこうりうは浄海かわさならず。しかるにかの平の京は。左青龍右(1オ)白虎前朱雀後玄武四神相應の地をしめし。北には只洲安馬寺。貴布禰の奥よりなかれ出る。水の行系をしら川や。東山に三井寺。鹿の谷の横つゝき。鬼門には比叡山伝教大師のさうくたり。みなみにおとこ山。石清水と名付て和光のかけ曇りなく。はくわうほうそを守護し給

ふ。西山の麓には松の尾と法林寺。龜山のおくよりもなかれ出る清龍を。大井川と名付てすゑをは桂川といふ。仁和寺(1ウ)

おむろくわうりうし。仏法ごちの此京にてたえする事有かたし。つらくものを安するに。なんばの四天王寺と奈良の京もたえせず。たとへは九条にたらずとも。末代のかた見に「カ、ルフシ」新京をたてゝ見はやとて「同」とをき國の指図までくわしく見るに。地形なし「コトハ」さてのみやまんする事の無念さに兵庫のうみをわつて見るにわつか五条のところなり。是ならてしかるへき地形もさらにあらされは。しよせんは是を福原の(2オ)

新京とさため。さと内裏をさうしんせん。この京はんしやうするならば。浄海かなきあとのかたみと人のおもへかし。安芸の嚴輪をも。此儀を以てさうしんす人々とこそ仰けれ。御一もんの人々。御説もつともしかるへう候とて。をのく兵庫に下り。われもくとやかたを立て。かくて爰にすませ給ふ。あるとき御舅平大納言時忠。すゝみ出て申されけるは。あはれおなしう候らは。あのじうかいをうめさせ。舟のとまりになすならば。本(2ウ)

朝にかほとの名所あらしと申されたり。しやうかひはきこしめされて。それこそなによりもきかまほしき事さうよ。四国西國の舟共か着ならば。弥々富貴たるへし。須磨板宿は遠あさなり。一の谷はあら磯にて。和田のみさきへよる舟の。磯まで着事なき間。家嶋かいそよりふく風に。はつそんするとてかなしめはこの京たてゝ曲もなし。とても一期の大願に。和田のみさきをすちかひに。たつみむきに海上を。三町計

うめさせ(3オ)

。その嶋の上に在家をたて。舟のとまりになすならば。数千艘の舟着とも。かせのなんにはあふましい。たゞしはるかの深淵を。うめんする事ともこそ。はかりかたふは候らへとも。「フシ同」たみをはこくむまつりこと。龍神も仏神も。なとかあはれみ。なかるへき。「コトハ」五条の大納言国綱の卿はおはせぬか。御身奉行してしまつかせられ候らへ。国綱の卿うけたまはり謹而申されけるは。むかしもさるためしの候。承平のまさかどは。坂東八か国をたいらけ(3ウ)

。下総の国相馬の郡に京をたて。まつりことをし給へとも。曆の博士がなくして。としのさかひを知らされは。五節の祝ひをもさためえず。是は末代までも。めてたかるへき御くわんなれは。「カ、ルツメ」はかせをめされ候らひて。「同」くわしき事のしさを。お尋あれと申されたり。浄海きこしめし。さる事ありとの給ひて。せいめいかなかれ。安部の安近安則に。三代のけうい。安氏と申て。天下の吉凶よをはかる。はかせをいそぎめさるれば。安氏や(4オ)

かて参らるゝ。浄海御らんして。今にはしめぬ安氏かうらかたにふしんはよもさうし。和田のみさをすちかひに。たつみむきに海上を。三町計うめさせてそのしまのうへに在家をたて。舟のとまりにせさせんと近日におもひ立ぬるは。成就すへきか如何さう。占かたかんかへ吉日とつて。島成就のきせいをも。明の加藤にまかせてたへ安氏こそ仰けれ。安氏承てもとよりうらは上手なり。打きくところのしかんきやく。五ぎやう(4ウ)

さうそくのうおんたう。しゆくよう十二道。六みやうたいようさんじゆつまで王相をきわめてかんかふるに。あやまる所はなけれども。うらにひとつの不審の候。しまをつかせて御覽せよ。一度に此嶋成就せし。ことのでいにりをうけ。うらなひ申候らはん吉日は三月十八日。吉時は辰の一天と。うらなひきため申す。浄海きこしめし。さらは国綱奉行をせよ。うけたまはると申て。いや大和山城がいせ播磨津の国丹波。七ヶ国の人夫をもつて。むこ(5オ)

山しうち山の。岩巖石を。くわつくと引崩して。わたのみさきへはこぼする。あしたうめけるたいもつを。みつしほはやくてさしくる。岩をかさね人夫をまし。宵にうめけるたいもつを。曉引しほはやくして。沖へはつと引ては出。うむれはさつとゆりくつす。たいもつ大石かす知らするうぎかいさこの塔には。おもはたよりも有ぬへし。五万人の人夫をもつて十日計はうめけれども。すこしもしるしの見えさるは龍神納受なきやらん(5ウ)

さていかゝはせんとそ仰ける。「コトハ」さる間しやうかひは。ことの外に御はらをたてさせ給ひ。安氏を召れ。汝はなにとうらなつて候そ。さらに此嶋成就せず。すいれんを入れて見せてあれば。うむへき所に石はなく。よしなきかたにちりい。さすかそこには波もなく。ことの外しつかなる由を申すか。いかやうの子細によつてかやうにはあるらん。さてのみやまんする事の無念さよ。いかゝはせんと御説なり。安氏承はつてさうなふしんをひらきえず。やゝしはらく(6オ)ありて申けるは。「クトキ」実よに任ならひは大事にて候。占のまゝ

申せはわか身のあた。申さねは天子の意をくたす。れうやうぢうくわのみたるへし。それ人間にかきらす。生を受ぬるたくゐの。命にましたる宝はなし。されは仏もいましめて。五百戒のその中に「フシ同」殺生戒を。第一にたもてときやうけ。し給へり「コトハ」此大願に科御座有へし。是はひとへに安氏か。業となりなん事こそ。何よりもつて口惜う候らへ。それをいかにと申に（6ウ）

。人はしらを御たてなくては。此しま成就あるましきと。占のおもてに見えて候か。ゆゝしき罪業是なるへし。御しあん有へく候。一人ならず二人ならず。三十人の人柱の立へきよしを申上る。浄海きこし召れて。もたせ給へる御しやくにて。たゝみのおもてをちやうと打て。

この事御披露有へからず。何としてもこの嶋の。成就すへき事こそさいわいなれ。それ堂塔をたつるにも。一旦は国のゆるき。民の心をなやませは。善も悪を先とする。それ善悪（7オ）

の二法といつは。裏と表のことし。今此しまの人柱に。立なんものもかならず。過去のしゆくえんなくしては。いかにおもふともとらるましいそ。さりながら人はしらを。一度にとらはあらはれて。路次をとゝめてはかなふましいそ時々とれと仰ければ。承ると申て。生田小屋野のあたりに。いかにも人をかくしをき。京よりも下るもの。初て京へのほるもの。ちうにてとつておしこめて「カ、ルフシ」こゑはしたつなといましめて「同」こくぢやうするそ。むさんなる。さ（7ウ）

こそ旧里の恋しさを。おもひやるこそあはれなれ。とられぬるもの共

か。かく有へしと期したらは。老たる親に暇乞。名こりおしき妻子にも。かた見をとらせて行末の。過はつへき。言の葉をなとかはかたりをかさらん。たゝ縦借の事なれは。けふよあすよと待くらし。かせのそよとふかんにも。すはやと思はん心のうち。いつをたのみにまつかね山。むなしく月日を送るとも。行多をしらねはよもたつねし。わか身のきえんいのちより。待宵むなしきふる（8オ）

さとを。おもひやるこそあはれなれと。籠の戸ほそにとり付て。かなしみあへる。ありさまを見るに。なみたも。せきあへす。一人二人の事ならず。二十余人とりぬれば。生田こや野ゝ辺にこそ。へんげのものが住やらん。道行人をちうにてとつてゆきかたしらすと風聞すれ。親をとらるゝ者もあり。一人もちたる子をとられ。きえんとかなしものもあり。丹波播磨伊賀伊勢。近国他国の者ともか。生田のあたりにみちくゝて。たとひ（8ウ）

まゑんのかきて。わか父わか子をとったりとも。せめてしかひを見せてたへ。いつ比か此野辺に。旅人うせて候と。尋かねたるありさまは野飼のうしの。暮ことに子を。たつるか。ことくなり「コトハ」かくするほとに壁に耳。岩のものいふ世のならひ。兵庫のうらの人はしらに。ことくゝ召れぬるとそ聞えける。尋かぬるものともかなのめなすによるこんで。里内裏に参り。おもひくゝこゝろくゝに。是は丹波の和田の者。是は播磨の明石（9オ）

のもの。禁野。片野のもの「カ、ルフシ」あるひは伊賀いせ都の者「同」たすけ給へと。こゑくゝに。かなしみあへるありさまは。め

いとおもむく罪人を。あんなまほうわうくしやうじん。みやうくわん達の。娑婆にてのつみを。かゝみに移され。獄卒の手に渡る時。六道能化の地藏尊。たすけ給へとさけびつゝ。かなしみ給ふもかくやらん。生死無常のうき世の中現世も迷途に。たかはすとよその。袂を。しほりけり。「コトハ」御前なりし御一門の人々(9ウ)

。此よしを御らんして。たとへはこの嶋なくとも。何に不足の御座候へき。あれく御覧候へ。しつむも残るもおしなへて。一かたならぬ懲敷ともは。未来の業とはならせ給ふへし。今はさても御座あれかしと。をのく申されたりければ。浄海きこしめされて。何とさふ御一もんの人。適々浄海か。思ひ立ぬる大願を。さまたけんとの食膳さふや。浄海もさ程の道に。まよふへきにて候らはす。それまかた国のあじやせわうは。ぶつしやうこくのせうくんわうにうた(10オ)

れさせ給ふ。海日大王は八万四千人のきさきを殺す。一性太子は。龍寿菩薩の命をとる。「カ、ルツメ」神通第一の目蓮は。「同」畜生外道に討れたまふ。無しやうの国にのほり給へる釈尊たにも。提婆たつたに。みあしを討れ給ふ。これ御ぞうえくのほう也。いはんや末世の。人間にをいてをや。善悪ふたつのきなくして。成就する事有へからす。因綱の卿はおはせぬか庭上にひれふすやつはらを。門より外へ追出し。じやうをつよくさいてをき。さうなく人を(10ウ)

入るなど内身に腹はたゝねとも。あるゝ気色を見せんか為。御座敷を御立あり。板あらゝかにふみならし。此しま無益とおほさんする。御内外さまの人々。御出仕はかなふましい浄海教訓せんもの。天か下に

覺すと。相の障子をはたとたて。簾中ふかく入給へは。御一門の人々。此よしを御らんして厄神天魔かきたつても。此人なたむる事あらし。三十人の人はしちを中くいそきそろへよとて。忍びくにとらすれは。廿九人そとつたりける。今一人とらんする(11オ)

。国共いあんならされは。道行人もとままつていや辺都遠路のたみまでも。おぢをのゝいて通らず。一人となつてそ日を送るあつはれ國土の煩やあふさなから民の。なげきなり。「コトハ」かゝりける処に。諸国をめぐる修行者一人兵庫の浦を通りけり。とり手の人数是を見て。爰にとをるは修行者なれとも。人待かぬる折節通り逢こそさいわいなれ。是を人数にせんとて。くび。かけたたる笠もきおとし。やかて人数になしにけり。取分て(11ウ)

彼修行者のゆらひをくわしく尋ぬるに。津の国難波入江のみつ松に。形部左衛門国玄と申ものにて候か。四十のあんに入まて子のなき事かなしみ。鞍馬の多門に参り申子をこそしたまひけれ。きせいものしはやありて。国玄三十二。妻女廿八と申す八月ゆふなる姫をまふくる。時しも十五夜の。くまなき月のさよ中に。生れぬる姫なればとて。名月女と名付。かんか本朝にもためしなふこそかしつきけれ。「イロ」その心中は光女にて。えんてん(12オ)

たりしさうがは。遠山の月に相同し。「カ、ルツメ」霞の内の。山さくら。「同」匂ひあくまで。身に余り。人にまみゆるそのすかた。池のはちすの朝露にかたむく。風情もかくやらん。ひめの姿を見きく人。及ふもよはさりけるも。望みはおよく有けれと。ませの内の八重菊

も。つゝめは。色のますふせひ。りやうじやうするかた。あらすして
十。三の暮まで。ひとり住。「コトハ」十四と申す花の比。父にも母
にも忍び。めのと計を引くして。蘆屋の野辺に立出て千種の色(12
ウ)

をなかめてあそぶ。爰にひとつのものかたりあり。丹波の国小川の庄。
能勢と申所は御室の御領なりけり。かの所のあつかせをは。仁和寺の
藏人兼氏とこそ申けれ。その子に藤兵衛家包とて。生年十九になりけ
るか。河内の国禁野に所領あるにより。十日はかりきんやに有しか。
是もつれ／＼さの余りにや。あしやの野辺に打出て鶺鴒をそしたりけ
る。家包は何となく姫のすかたを見付。うつろひやすき紫の。色染ぬ
るこそよしな(13オ)

けれ。思ひの外に立出ては。あしかりなと思ひ。供のものををははる
／＼としのはせ。わか身は一むら薄の候らひけるに休らひ立て。姫の
姿を心しつかに見奉るに。夕日にしにかたふき給へは。姫は家路にか
へらんとて。「クトキ」こまつなきの一ふさもえ出たるを。とり持て
「サンイロ」春はまづ。駒つなきにそ。若葉さす。ふる葉の色も。
見えわかほこそ。「コトハ」か様に歌して立帰らんとし給ふ。草村に
しのふ家包か。忍ぶこゝろのつゝみかねて。「イロ」春の野に。主も
見え(13ウ)

さるはなれ駒。くものゐにても。つなきとめはや。「コトハ」かやう
にゑいして願れ出る。名月は御覽してなふはつかしや此野辺に人有へ
しとも知らずして。口すさみけんかなしやと。おほし召れける間。お

もひの色も青柳の。いと恥しけなる御あり様は露にしはるゝ花かよ。
乳母もさそはすふり捨て。いそかはしけに帰るさは。嵐にたくう落花
の更行風情もかくやらん。家包はいとゝ心のあくかれて。めのとかた
もとをひかへて申す。なふ。夫婦和合のなさは(14オ)

。私ならぬ事なり。四十内の相生も。いつもしの神のむすひなり。
虎ふす野辺をふみならし。草村にきえんも此道なり。伊勢物語源氏に
も。かやうの事をこそつたへては候らへ。たとへは卒尔の饑成とも。
風のたよりになひけてたへ。お供の人といひ捨て。いそき追付奉り。
そこつたる申事にて候らへとも。狼藉ながら御供を。申へきにて候と
て。そこともしらぬ野辺よりも。駒にとつて打のせ申。めのともとも
に引くして丹波の能勢に帰る(14ウ)

「クトキ」あらいたはしや二人の人々は。鬼にかみとる風情してふる
里しのふ中々に。朝夕疎なく思へとも。めのとはをそれて音信をせず。
名月は父母のふけうをいたくはゝかり。明ぬ暮ぬとせし程に三とせに
なるは。程も。なし。国支ふうふのなけきは申計もなかりけり。人の
子のあまたあるへたにも。別といへは物うきに。いはんや是は仏神
にきせいを申てたゝ一人。持たる姫にてある間。世にたくるぬなくかし
つきしを。「フシ同」行方しらす。うしなひて。なけくおもひは(15
オ)

いかはかり。いたはしや母こそせんは。三とせと申。秋のくれおもひに
きえそ。はてにける。形部左衛門国支は。一かたならぬ。おもひとも
に妻女のかた見をとりあつめ。高野の嶺に参りつゝ。奥の院にてもと

ひきり。さいちよのかた見をこめをきて。姫か行系をたつねんとて。高野の峯を。下向してまづ三くま野に参らるゝ。三つの御山をふしおかみ。尋給へと行かたなし。四国にわたたりて尋ぬれと。其行かたのあらされは。又舟に便給し。播磨の(15ウ)

室にあかりつゝ。都のかたの床しきに。明ぬ暮ぬと上るとて。兵庫のうらを通りけるか。とりての人数に行合て。おさへてとられて鑑者となるにもかくにも。国玄か運の。すゑとそ。聞えける。「コトハ」

すてに此しは。三月十八日の。辰の一天とさたまりけれども。人はしらのわつらひにより。卯月も過て五月になる。卯月皇月にはよき日もなしとて。六月廿三日のうしの刻にそきたまりける。捕れぬる者共か。あゝとてもたすかるへき身にてもあらず(16オ)

。はやして海にしつめられ。みくつになつてきえはやと申あふこそ哀なれ。「クトキ」中にも国玄のおもひそいとあはれなる。かくあるへしと期たらは。高野の峯にて露とも。霧ともきゆへきものを。姫か行系のゆかしさにもしくとおもひ。かゝる修行に思ひたつて今更うき目を見る事よ。「フシ同」かほとにうすきえんならば。何しに生れきたりけん。うらめしの契りやとて。親子のちきりをは今更恨。給ひけり。「コトハ」かやうになけかせ給ふ思ひのねんや通し(16ウ)

けん。丹波ののせにおはします。名月女の御かたへふしきの便そ候らひける。その故いかにと尋ぬるに。たとへは津の国。渡辺ちかき神崎に。葛和の庄司長清と申人の子に。近藤氏重友とて候らひしか。是も国玄の姫の姿を。一目見しよりこのかた。しつ心なき恋となつて。よ

りくつくし申せしに。思ひの外にかの姫の。うせぬるよしをつたへき。世をあちきなく思ひきり。やかに通世し。諸国を修行仕とて丹波ののせにつく。名月女のまします(17オ)

事をは夢にも思ひよらず。家包か門外により。袖の上の時傾を所望して休らひしか。さもあれ国玄か。兵庫の浦の人はいしに。とられぬるよと浅ましくて一首の哥をそあしける。「下」うき世そと。思ひ捨ても一筋に。人の上にも。うき事そきく。「コトハ」かやうに詠して休らひけり。おりふし名月はものごしちかく御座ありしか。たゞ今の哥をきくからに。何とやらん胸打さはき。人を出して修行者をいつくの人そとはすれは。かく浅まし(17ウ)

き修行の身にて。よにあり顔に古里を申へきにはあらねとも。あふつゝみても又何かせん。是は津の国。神崎のものにて候。乳母も名月も。かんさきときくからに。吹くる風もなつかしくて。障子を少々け。その隙よりも見出せば。年にもたらぬ修行者なり。いかに修行者。以前のあらましに。うき世そとおもひ捨ても一筋に。人の上にもうき事そきくと。口すきみ給ひしはさて世に何事のさふらふそや。修行者承り。さん候人の上と申も(18オ)

。此発心のゆらひなり。何をかつゝみ申へき。かたつてきかせ申へしたとへは津の国。難波入江の三松に。形部左衛門国玄と申者。一人の姫を持て候らひしか。玉の姿を身にまとい。なさけのふかき心さしは。楊貴妃李夫人にも。相おとらしと聞えしを。住よし詣の有し時。一目見しよりこのかた。しつ心なき恋となり。よりくつくし申せしに。

おもひの外にかの姫の。うせぬるよしをつたへき。よをあちきなくおもひきり。やかてとんせいし。かやうに諸国をめく(18ウ)

り候か。この四五日かさき程に。旅人のつてにふるさとの事を尋て候らへは。其名月女の母は去年の秋むなしくなりぬ。ちの国玄は。一かたならぬ思ひ共に。高野の嶺にて遁世し。諸国を修行仕とて。兵庫のうらの人はしらに。とられ。六月廿三日に。しつめらるへきよし。

承及て候程に。あふうかりしものゝ行ゑさへ。かくなりぬるよと浅ましくて。なにとなく腰おれをつらぬぬると申。名月はきこしめし。夢かとおもへはうつ。現かとおもへはまことしからず(19オ)

。重ていかにとはすれは「クトキ」なふさのみはとせ給ひそよ。うき身のかやうになりぬるも其姫ゆへの事なれば。なにはに付てうらみの数。涙ならては友もなし「フシ同」よその見る目も。はつかしやと袂をかほに。押あつる「クトキ」名月はきこしめしめのとをめてして仰けるは。実々左様の事の有しそや。住吉まふての有し時。輿のさきに玉章を引結ひておとせしを。供の女かひろひ取て。みつからに見よといふ。何なるらんと見てあれば。おもひもよらぬはなを(19ウ)

を見て。露と消なん悲しさよ。もし此かせの便を不便とおほしめし。御返事ましまさは神崎に聞えたる。釈迦堂のかねの緒に結ひてたへと書とめて。奥に一首の。哥をかく「下」知らせても。しるしなくてはすぎのかと。明ぬ暮ぬと。いかてまちなんと「フシ同」書とめたりし水くきを。たゝ大かたに。思ひなし。捨たりし事の有しそや。我

を忍ぶの。恋衣今きて見るそよしなき。我ゆへかやうになる人ならずは。たゝ今も立出て。ちの母の御事も。とは(20オ)

まほしくは思へとも。われ故かやうになるといへは。さすかかふとも。いわしろのまつ。ことのはもかきくれて。おつる涙の隙よりも。めのとほなきか修行者にとき。れう奉つれやとて。簾中。ふかくいり給ひ綱引かつき。打ふしてりうていこかれ。給ひけり「コトハ」その比丹波の国へは。みやこより本家の一族御下向あり。三日のかりくらあり。国にありあふ弓とり達みな。かりくらに出らるゝ。家包も罷出。かゝる他行の隙なるに。父母の御事をきこしめし。ある(20ウ)

にあらぬ御ありさま中々申すはかりもなし。めのとをめてして仰けるは。此人帰らせ給ふならば。いかにおもふと叶ふましい。少もいそぎゆき。ちの命にかはるへし。めのとこの女房承り。さらは御いそぎさふらへとて。人目をつゝむ事なれば。夜半にまきれてたゝ二人「カ、ルモンタイ」丹波の能勢を立出て。足に任て。たとり行「フシ同」かのみくさ山と申すは。木こりのかよふ道多し。かなたこなたとふみまよひ。とある木陰に。立寄て。一夜を。あかし。給ひけり。かくてもはてぬ夜半なれば(21オ)

。月西山にかたむき。ほのくゝとあかしかたなる早天に。やうく木陰を立出る。末の松山恋の森。こゝろ計はいそけ共。行道さらに見もわかす。日輪出させ給ふをこそ。東とはかりはわきまゆれ。西北にまよへと。何とてか。南へ。道の。なかるらん「コトハ」かくて二人の人々は。そのぬししらぬ玉章の。ふみまよひ行折からに。斧斤鉞を

持たりし山人一人行逢たり。此山人か。二人の人を見参らせ。あらふしきや。秋待かぬる萩の花。桔梗刈童女郎花。つゆ(21ウ)

おもけにてくねるかや。時雨にそむる紅葉葉と。ませの内の八重菊に。相まかひぬる女房の。やかんのおそれもはゝからて。袖しほれたる立姿。なにをしるへの便にか。人輪まれなる深山に。かやうに立入給ふらんと。「カ、ルモンタイ」あやしめ申て立程に。／＼とかめも。／＼ともせられすして。／＼互に休らふ。／＼はかりなり。「フシ同」いや虎狼の変化か。あやしやと山人の。思ふもことほりなり。「コトハ」めとの女房を見。心ありけなる山人なり。いつはつて兵庫への道の案内をとほはや(22オ)

と思ひ。いかに山人よ。わらは共と申すは。当国はつかの郡の者なり。是にまします上臈のちゝこは。兵庫のうらの築船の奉行にたゝせ給ひ。さらにひまなくおはします。はゝごは継母にて。ことの外にくませ給ひ。ちゝご帰らせ給はぬさきに。あらざる事を申付。うしなふへしとのたくみのさふらふ程に。みつから余りのいたはしさに。夜半にまきれて御供申。兵庫の浦を心かけ。是までは参てさふらへ共。「カ、ルモンタイ」行系をしらて。／＼たゝすむなり。「フシ同」野にも山にも(22ウ)

しるへ草。兵庫のうらへの案内をしへ給へや。山人よ。「コトハ」此山人か承り。あらいたはしや候。さらはとくにも左様に仰候らして。こなたへ御入候らへとて。谷川を渡りそわをゆく。高き所にあかり。あれ／＼御覽候らへ。西へ道の候はあれは。室高砂へくたる道。かま

へてそなたへゆかせ給ふな。たつみへ少ゆき。一段高き所よりも。東のかたを御らんせられ候らへ。みなと川さいたかしもかんとり

「カ、ルフシ」雀の松はらみかけの森。「同」雲井にさらす。布引や。渡辺かん(23オ)

さき天王寺住吉のはまも見えぬへし。西は明石高砂。大倉谷といふかたなり。南にかすめる落こそ。兵庫の浦にて候らへ。東西へわかつ道のへの。いかに多く候と。さうへあやふみましまさて。兵庫の浦を。目にかけて直にゆかせ給ふへし。名残おしうの夕日影。是より御いとま申すとて山人は。峯にとまりけり。めのとも主ももろとも。此おそろしき山の内。道しるへせしうれしさよ。いか様是は。山人にてよもあらし。多年願をかけ申す。くら(23ウ)

まの大悲。多門の山人と現し給ふかや。有かたさよとかたりつゝ。さしもにもものうき道なれ共。此もの語に罷て。漸々ゆけは。津の国の兵庫につかせ。給ひけり。「コトハ」ある浦人行合せ給ひ。人住の御事をいかにととせ給へは。此浦人か申けるは。上臈達は何を御尋候そ。かみさまよりの御説には。惣して人柱の行系とて。尋きたりたらんものに。案内をもしらせ。音信をいはずたらんものを。やかて取て人はしらに。たつへしとさためをかせ(24オ)

給へは。いかに上臈達をいたはしく思ひ申せはとて。わか身にかへて申へきかとかたり捨てそとをりける。さすかに道理なりければ。かさねて尋ぬるまでもなく。とあるところに宿をとりむなしく日数ををくらせ給ふ。さても丹波の家包は。三日のかりくら過。我か宿所にまか

り帰る。うちの者はしりむかつて。かみさまこそ過し夜。めのと計を引くして。うせさせ給ひ候を。いかにたつね申せとも御行かたもまします。いかゞはせんと申す。家包きい(24ウ)

て。あらふしきの事を申すものかなと。「コトキ」れんちうに立入見るにけに／＼うせて見え給はず。こはいかにとあきれはて。常に住けるところをみるに／＼わしき事を書をかゝる。なに／＼今生ならさる花のえん。かやうにちりかはるへしとはゆめ／＼おもはさりしに。ちゞはゞの御事をかせのたよりにきゞさふらへは。身の科業もおそろしく御身のともうらめしや。いたはしやはゞごぜんは去年の秋むなしくならせ給ひぬ。ちゞの国玄は一(25オ)

かたならぬ思ひ共に。高野の嶺にてとんせし諸国を修行めさるゝとて。兵庫の浦の人柱にとられさせ給ひ。けふとも明日とも御最後をさためぬよしをきゞさふらふ。かくてもあらぬ事なれば。すこしもいそぎ行ちゞのいのちにかはるへし。なさけのゑんのつきはこそ御身のうらみもおはせぬ。おほしめしわすれすは。「フシ同」菩提をとうてたひ給へかへす。／＼と。書とむる。「コトハ」家包是を見て。あらくちおしや。兵庫のうらの人はしらはは(25ウ)

・たゞ大かたにおもひなし。よ所のなけきとおもひしに。身のうへかゝるわかたもとの。なみたの雨と成ぬる事よ。道理なりことわりや。何にいのちのおしからん。去なからかねては。比翼連理とちぎりつるに。などや夢ばかり。しらせてたはせ給はぬそと。取ものをもとりあへず。駒をはやめてうつほとに。兵庫の浦につき。あなたごなたとた

つぬるに。「カ、ルモンタイ」兵庫ひろしと申せとも。／＼けにやつきせぬ。／＼ちぎりかな。「フシ同」女房の宿にたつねあひ。うれしと云も(26オ)

・中々に申はかりも。なかりけり。「コトハ」さてなふ父ごの御事をいかにととせ給へは。中／＼にいんしんをさへ申さぬなりとそなけかれける。家包きいて。御こゝろやすくおほしめせ。このしまは。五条の大納言国綱の卿の一ゑんに。御あつかりとうけたまはる。よき内殿をもち申て候。やかてまいりて申さんとて。国綱の卿にまいり。このよしかくと申されければ。国綱の卿きこしめし。めん／＼さまの御訴訟。自所の事にて候らはゞ。なにかはそむき申へき。此しまは。わた(26ウ)

くしならぬ御願なれば。国綱かはからひにてはかなひ候ましい。明々日はかならず。島つかるへき内談有へし。里内裏にお参りあつて。ていちうあらは国綱も。心のをよひ申へし。御一門の御座敷を。何給へとありしかは。かしこまつて候とてわが宿所にまかりかへり。よもすから出仕のいてたち引つくり。あくれば出仕つかまつるとて。女房にかたりけるは。此事申かなへすは。庭上にて腹きつて。迷途罔魔のちやうにて。まち申さんとかたり捨。さと(27オ)

内裏に参り。ことのやうをかゝひけるに。浄海かねての御定めには。三十人の人はしらか。十八人は男にて。「ツメ同」今十二人は女ときく。おとこ十八人は。沖にしつめ。女十二人をは。磯のかたにしつめよ。とり／＼の敷を。わけて見んする事共も。中／＼おもふもふひん

なるへし一度にはつとしつむへしと。仰出されたりければ「フシ同」おもひきりぬる。家包もきも。魂も。身にそはず「イロ」今申さてはいつのときに申へきそとおもひ「コトハ」ふるへるこゑをさし上。一人ならぬなけ(27ウ)

きを。わけて言上せしむること。よにおゝそれ多き申条にて候へとも。三十人の人はしらの。まんする時めしをかれ候修行者は。津の国難波入江の三松に。形部左衛門国玄と申ものにて候か。去年の秋妻女にはなれ。かやうの事をや存知けん。高野の峯にてとんせいし。諸国を修行仕とて。御願の人数にめしをかれ。しまの柱となりさうへき。かの修行者か娘は。此家包めかさい女にて候。父か最後のよしを承り。命にかはらんと申て。〈是迄は〉(28オ)

参りて候らへとも「クトキ」さすか女にて候程に。おそれをなして殿中へ申上る事なふて。余りなけき候程に。いゑかぬめかてんちう申上る事のかたしけなさよと申て。おそれをのゝくあり様は「フシ同」水にしたかふ柳のふし。しつめるか。ことくなり「コトハ」浄海聞しめされて。あれは何と申たる訴訟そ。惣して人はしらの行多とて。尋きたりたらんものに。案内をも知らせ。いんしんをもいはせたらんものを。やかてとつて人はしらに。立へしとさためをきたるに(28ウ)

。たかはからひによつて是まではきたりたるそ。たとへは父かいのちにむすめかかはらんと申を。叶ふまじきにてはなれとも汝もおもひてみよ。一人あはれみとりかへなは。自余のうらみをいかせん。

中々おもひもよらぬ事なれとも。余り汝か。生害にかへて申ところのふひんなるに。明々日は相待よ。そつと見参さすへしと。御内にいらせ給へは。家包もときの面目をほとこし。我か宿にまかりかへり。あらめてたや候。明々日はかならず。父国玄をたま(29オ)

はるへしとの御諚の候。御こゝろやすくおほしめせとにかかくに「サシクトキ」なくさむれとも名月は。ちゝにもあわて此まゝ。さてのみはてんするかなしきよ。父よゝと云けるを「フシ同」物によくく。たとふれば。きらうこくのはくとうか。さんろにすてしちゝを乞。老父くくと三度呼。消いりつらん。ありさまもかくやと思ひ。しられたり「コトハ」かくするほとに人はしらの。吉日吉時にはやなりぬ。三十の籠をつくらせ。三十人の人柱を。ろうより籠に入させ。舟一艘に一人つゝとそきた(29ウ)

まりける。妻子したしきものともか。近国他国よりきて。あれはわか子かわか父か。あるひは兄弟なんとて。りうていこかれかなしむを。はう一じやけんのものゝふ共。こゝろよはくてかなはしと。しもとをあてゝ追のくる。今を最後の事なれば。いひたき事のかすくは。さこそとおもひやられるれとも。せめてちか付事なければ。笠をあげたもとをあげ。有にあらぬありさまは中く申すはかりもなし。中にも国玄をは。よの人はしらにはまはらせす。ゆへ(30オ)

をいかにと申に。家包さるゆみとりなれば。とてもかなはぬ道とおもひなは。いかなる事をかたくむへきに。軍兵をあまたそへよとて。ろうよりかこに入させ。ちうになひて出る。めのとの女房これを見て。

なふたゝ今とをらせ給ふこそ。父国玄にてましますと。申もあへぬに名月女。笠をかしこになけすて。諸人の中をおしわけ。このかごとり付。なふ名月女こそまいりてさふらへ。みつからともにしつまんと。いはんとすれば武士。しもつと(30ウ)

あてゝのけんとす。いゝかぬその身をはゝからで。あゝなさけなしとよものゝふたち。その人一人計をは。御めんあるそといへは。とぎの奉行の上総のかみやあ。あらくな申そ其人は。重々そせうのあるかたなり。すこしかごをかきすゑ。名こりおしませ申せ。承ると申て。かごをかしこにかきすゆる。「カ、ルモンタイ」終のわかれとは思へとも。つかのまの対面さこそやと。おもひやられて。中々に「フシ同」よろこひのなみたは測となつて。くかにてしつむ。はかりなり(31オ)

「クトキ」やゝありてちゝ国玄はおつるなみたの隙よりも。けにこゝろさしのましますはこそ。是まてはたつねきたりたまふらめとも。何とてか人の子の。親のおもふ心中にさをいしてあるらん。わこせかおもひふかうして。母はつるにしゝてあり。国玄もおなし道にと。千度百度思ひつれとも。うき世にもしもなからへは。わこせか行あやきくとおもひ。かゝる修行に思ひ立て今更うき目を見る事も。ひとへにわこせか。ゆへそかし。子はかたき家宝(31ウ)

かと。善悪ふたつをあんするに。「フシ同」人の子は。たからにてわこ。せは親の。かたきなり。かくはいひてあれとも。ふかきうらみはのこらぬぞ。このとし月仏神に。きせい申せしりしやうには。命の内

に見つるこそ。何よりもつてうれしけれ。かやうに小車のめぐりあふへき道ならば。はゝもろともになからへて。みるとたにも思ひなは。いかゞはうれしかるへきを。たゞしうれしき中にも。かくあさましき最後の躰を。あのまれ人に見えぬこそ。何よりもつてはつかし(32オ)

けれ。よし／＼それもことのえん。ひめを思ひ捨給はずは。見しものと。おほしめし菩提をとふてたひ給へ。なさけなのめのとや。かほとに近きあたりに。すみなからへてあるものか。今まで音信せぬ事よ。うらめしさよとありしかは。姫はなみたの隙よりも。御道理にておはします。ゆるさせたまひさふらへや。みつからともにしつみつゝ。御手を引へて三途の川。死出の山路をこえ過て。あんまの町の御供を。申へきにてさふらふそや。みつからをも此(32ウ)

かごに。そへさせたまへ人々とてもたへこかれかなしめは。ちゝもかこのうちにして。嗚てはくときうらみてなく。善知鳥かなかす。ちのなみた今こそ思ひ。知られたれ。人のなげきもわかおもひも。うき世にすめは多けれと。かゝるあはれはたくぬなしと。上下はんみん。おしなへて袖を。しほらぬ。人そなき。「コトハ」上総の守は御覽して。あゝらいたはしの御ありさまや候。かくては時刻うつるなり。はやしてかごをかゝせよと。又ちうに荷なひて出る。さる間浄海は。和田のみさきの(33オ)

観音堂にて御見物あるへしとて。儀王儀女をさきとして。御一もん三百余人。さゝめきわたつて出させ給ふ。博士の安氏は。渚にかなしむ

ありさまを見て。是はひとへに安氏か。業と成なんことこそ。何よりもつてかなしけれ。いかゞはせんとおもひ。観音たうに参り。御前にかしこまり。あれ／＼御覽候へ。諸人のなけきはひとへに。あび大じやうの罪人の。熱鉄の炎にむせふらんもかくやとおもひ知られて候。

されは教主釈尊の。難行吉行。実相(33ウ)

をとかせ給ひて候。釈尊一代の説教に。法花経を經王とす。所詮一万部の法華経を書写させられて。三十人の人はしらの。名字名のりを書しるし。しつめの石には年号日付。龍神納受ましませとて。海底にしつむる物ならば。五十転々の随喜のくどくには。八十億劫の生死の罪を滅し。かならず嶋は御成就候へし。いかゞと申されたりければ。

中々御返事までもなく。御眼のけしきかはりければ。御一もんの人も。はかせの安氏も。皆(34オ)

赤面してこそおはしけれ。さても丹波の家包は。おそれをもはくからす。女房めのと引くし。観音たうにまいり。庭上にひれふし。あら御なさけなや候御たすけあれと申さんにこそ。にくしとおほしめすへけれ。「クトキ」二人かいのちに一人を。めしかへさせたまはんには。何のふそくの御座候へきぞ。しかるへくも候らは。われ／＼ふうふに国玄を。めしかへさせ給へやと。天にあふき地にふし。りうていこかれかなしみ。けり。「コトハ」浄海つく／＼と御らんして(34ウ)

。ふひんとやおほしけん。きわうをめて仰けるは。やあ人の上にあふく風の。わか身にあたりん事やある。いかにこゝろつよくとも。なとあの女かあはれをとふてゑさせぬぞと。仰出されたりければ。きわう

な／＼めによるこふて。名月女のそはにゆき。御なけきを浄海も。ふひんとおほしめさるゝに。御まへちかく御参り有て。御申あれとてひつたつる。浄海御らん有て。ちかふ参りて申さすとも。汝か訴訟をははやくわげぬるぞ。さらは国玄一人をは。あの女に(35オ)

とらせよ。のこる廿九人をは。とつくしつめよと仰ければ。残る人数

のなけきは中／＼申はかりもなし。かゝりける処に。浄海の御内に。三十人のわらはの中に。松わうこんれいと申て。みめかたちぢんしやうなるか。君の御まへに参り。三十人の人はしらを。こと／＼く立させ給ふとも。人の歎の嶋ならば。成就する事候ましい。又おほしめし立給ふ御願をむたにし給は。君の御意にもそむくへし。所詮はかせの申されしことく。一万部の法花経を(35ウ)

書写させられて。三十人の代官に。松わう一人立ならば。末代嶋は成就して。たえする事候ましいと。「カ、ルフシ」申こうたる松わうは

。「同」上古も今も。末代もためしすくなき。こゝろかな。「イロ」浄海きこしめされてまことに。随喜の涙をなかし。「コトハ」あらふひんの松わうか申事や。さらははかせともかくも。はからへと仰ければ。安氏な／＼めによるこふて。急はまに下り。先国玄をとり出して。名月女のかたへ返し給ふ。のこる廿九人をも。皆とり出し給ひて(36オ)

こと／＼く返し給ひければ。「カ、ルモンタイ」うけとり／＼はまに出。「フシ同」うれしきにもなみた。つらきにも。なみたきたつものは涙なり。「片ツメ同」卅人の人はしらふしきのいのちた

すかるは難波入江の国玄の姫故なりとよろこひ。我が国さにかへりて。或は兄弟。孫子共に。とり付。悦ぶ事。うら嶋かいにしへ。七世の孫にあひぬるもかくやとおもひ知られたり。浄海よりの御殿には。丹波の国の家包か。しうとか命にかはらんとおもひ切こそやさし(36ウ)

けれ。蔡野片の能勢の庄八百町をとらするそ。しうとを扶持して天下へもよきにみや付申せとてくたしたふこそめてたけれ。又。吉日を改。七月十三日に。さためさせ給ひて。一万部の法花経を。洛中洛外の寺々へ。日記を上て。書写させらる。ほとなく御経出来兵庫のうらへ参らす。はかせ御経とりあつめ。敷のごへいを。切立て舟おしうかへ打のりてはるか沖へ押出し。御経しつめ。ごへいをふつて。やけうしやくのつとを(37オ)

申さる。まことに松わう。望申ける間かれ一人人はしらに立られけるそ有かたき。とくしゆの御経あるへしとて。一千余人の。御僧たちを。洛中。洛外よりしやうし下し給ひて。洛に御経あそはせは大きぢくの結縁の。龍神納受。あるによつて。しまは成就する。十四丁の所なり。経の輪と申て。平相國のこうりうの今にあるとそ見えにける。名月女と申もたよのつねの人ならず。鞍馬の大悲。多門天の。御はからひによつて(37ウ)

。吉浄。天女の化身にて。しまをも成就。人はしらをも。たすけん為に名月と現し給ふなりさて松わうと申もたよのつねの人ならず。大日王の。化身にて嶋を成就の其ために立給へるときこえける。つたへ

きくいにしへの。だいせ太子は。忝も。如意の玉をとらんと。えんしの貝をもつて。ちよつかいをはかりつくし終に宝珠え給へり。大願としては又終にむなしき事あらし。此浄海も。末代たみを。あはれみて兵庫にしまを築たまふ(38オ)

地藏さつたの化身。慈悲誓願の御ちかひ有かたしとも中々。申はかりもなかりけり(39ウ)

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(毛)毛利家本、(東)東大本、(松)松村本、(慶)慶応大学蔵小八郎本、(京)京大本、(直)直熊本

1オ ○所にて―(慶・京)さしきにて ○よにある―(毛)世に

2オ ○末代のかたみに―(慶・京)末代のしるした、(直)ナシ ○

兵庫のうみ―(他本)兵庫のうら

2ウ ○新京とさため―(毛・慶・京・直)新京と名付 ○われも

く―とやかたを立て―(毛・直)我もく―と屋形をたて福原の新

京と名付、(慶・京)ふくはらの新京をたて

4オ ○さる事ありと―(京)去事

6オ ○とそ仰けるさる間しやうかひはことの外に御はらをたてさせ

給ひ―(慶・京)との御ちやう也じやうかひおほきにいかつて

6ウ ○是はひとへに―(慶・京)ナシ

- 7ウ ○時々とれと仰ければ―(毛・慶・京) 時々とれとの御誕なり
- 9オ ○兵庫のうらの人はしらに―(慶・京) 兵庫の浦のつき嶋の人はしらに ○なのめなすによるこんで―(慶・京) ナシ ○里内裏に参り―(毛・直) 里大裏にまいる庭上にひれふし、(慶・京) 里大里に参りていしやうにかしこまり
- 9ウ ○御前なりし―(慶・京) ナシ
- 10オ ○あれく御覧候へ―(毛・慶・京・直) ナシ
- 11ウ ○かゝりける処に―(慶・京・直) 爰に ○くびかけたる笠もきおとし―(毛・東・松・直) 首にかけたる笠もきすて、(慶・京) ナシ ○取分て―(毛) 角て人数は悉くそろひけり思ひはいつれおとらねとも取分て、(慶・京・直) かくて三十人の人柱はことくそろひけりおもひはいつれもおとらねどとりわきて
- 12オ ○津の国―(慶・京・直) たとへばつのくに ○きせいしるしはやありて―(毛・慶・京・直) ナシ
- 12ウ ○花の比―(他本) 花の春
- 13オ ○生年十九になりけるか―(毛・東・松・直) さふらひしか、(慶・京) 其年十九に成けるが
- 13ウ ○思ひの外に立出ては―(毛・東・松・慶・京) 声たつ計に思へ共おもひの外に立出ては ○供のものははるくとしのはせわか身は―(直) ナシ ○立帰らんとし給ふ―(毛・慶・京・直) 立帰る
- 14オ ○おほし召れける間―(毛・直) ナシ ○夫婦和合のなさは
- ―(毛) 夫婦情の和合は
- 14オく14ウ ○家包はいとゝ心のあくかれて：申へきにて候とて―(直) ともの女にをつゝきすこし心をあわせつゝいそぎ名月のそはにゆき乳母もひたしきなかなれは何かわくるしく候へきくれて行ゑをあしやの野辺かへるさの御供を申すへきにて候とて
- 15オ ○鬼にかみとる風情して―(慶・京) ナシ ○朝夕隙なく思へとも―(直) ナシ ○なけきは申計もなかりけり―(直) おもひそいとゝあわれなり
- 15ウ ○奥の院にてもとひきりさいちよのかた見をこめをきて―(直) 妻女のかたみを籠置て奥院にてもとい切 ○姫か行ゑをたつねんとて―(直) ナシ ○三つの御山をふしおかみ尋給へと行かたなし―(直) 姫か行ゑのこいしさに
- 16オ ○運のすゑ―(毛・直) 運のきは、(慶・京) うんのきわめ ○さたまりけれとも―(他本) 定めをかれけれとも ○うしの刻―(他本) 午の刻 ○身にてもあらず―(毛) 命にてあらず、(東・松・直) 命にてもあらず、(慶・京) いのちにてもあらばこそ
- 16ウ ○はやして海にしつめられ―(毛) はやして海に入られて、(慶・京) はやしてうみへ入られて、(直) はやして海にいれられ
- なかせ給ふ―(直) かきくとぎける
- 17オ ○丹波ののせにおはします―(毛・直) 又神のちかひにてやさふらひけん丹波の能瀬におはします、(慶・京) またかみのめくみにてや候らひけん丹波ののせにまします ○たとへは津の国―

(毛・直) ナシ、(慶・京) 是もつの国 ○一目見しよりこのかたしつ心なき恋となつて―(慶・京) みつけ ○より／＼つくし申せしに―(毛・慶・京) 時々心を尽せしに ○世をあちきなく思ひきり―(毛・慶・京) ナシ ○是も国玄の姫の…やかて遁世し―(直) これも名月ゆへにとんせいし

17ウ ○門外により―(慶・京) もんくわいにたゝすみ、(直) 門外にたゝすんて ○さもあれ国玄か―(慶・京) 明月の事をおもひ出しさもあれ国春が ○浅ましくて―(毛・慶・京・直) あさましく思ひ出て ○休らひけり―(毛・慶・京・直) たゝすみけり ○かく浅ましき修行の身にて―(直) 修行者承り

18オ ○かさきと―(毛・慶・京・直) かさききの者と ○障子を少あけその隙よりも―(慶・京) しやうじの隙より

18ウ ○何をかつゝみ申へき―(直) ナシ ○玉の姿を身にまとひ：相おとらしと聞えしを―(直) ナシ ○一目見しよりこのかた―(毛・慶・京) そと見初しより、(直) そつとみそめしよりこのかた ○しつ心なき恋となり―(直) ナシ ○より／＼つくし申せしに―(慶・京・直) より／＼心をつくしせしに

19オ ○四五日かさき程に―(慶・京) 二三日のさきに ○旅人のつてに―(他本) 商人のたよりに ○浅ましくて―(毛・直) あさましく思ひ出て

19ウ ○とはすれば―(毛・東・松・直) 尋ね給へは、(慶・京) たつねさせ給へば ○きこしめしめのとをめてして仰けるは―(慶・

京) きこしめし、(直) 乳母の女房にの玉いけるわ

21オ ○めのとをめてして仰けるは―(直) ナシ

21ウ ○折からに―(毛・直) 折ふしに、(慶・京) おりふし ○二人の人を―(慶・京) ナシ

22オ ○袖しほれたる立姿なにをしろへの便にか―(直) ○とかめもといも―(慶・京) とがめも ○道の案内をととははや―(毛・慶・京) 案内を尋はや、(直) 案内をきかはや

22ウ ○いかに山人よ―(毛・東・松・直) 如何に是なる山人よ、(慶・京) 是なる山人にたつね申(慶「申」ナシ) たき事の候 ○築嶋の奉行―(京) 人はしらの奉行 ○兵庫の浦を心かけ―(毛) ナシ

23オ ○あらいたはしや候―(慶・京) ナシ ○左様に―(他本) ナシ ○そわをゆく―(毛・直) そわをゆく乳母も明月も互袂を取かはし(直「とりちかへ」) 草葉／＼を分てゆく ○あれ／＼―(毛・東・松・直) ナシ、(慶・京) 是はいにしへひやうこへのおゐわけと申て候をきん年人まつがたうげと申ならはすゆらいの候かたつてきかせ申度は候へとも少もいそがせ給ふじやうらうたちにて御さあるあひだねんごろにはかたり申さぬなり ○かまへてそなたへゆかせ給ふな―(毛・直) ナシ

24オ ○人住の御事をいかにととはせ給へは―(毛・東・松) 人はしらの行多をたつねさせ(東・松「させ」ナシ) 給へは、(慶・京) 人ばしらのゆく多をいかにととはせ給へば、(直) 人柱のことを

尋玉へは ○かみさまよりの御殿には―(直) ナシ

24ウ ○とかたり捨てそ―(慶・京) 中くおもひもよらぬ事也とかたりすてよそ

25オ ○あきれはて―(慶・京) あさましくて ○ちよはよの―(慶・京) ちよはわきよの ○かせのたよりに―(毛・直) ナシ

25ウ ○かくてもあらぬ事なれば―(慶・京) ナシ ○あらくちおしや―(毛・直) ナシ

26オ ○道理なりことほりや―(毛・慶・京) ナシ、(直) 道理なりことわりなり ○何にいのちのおしからん：比翼連理とちきりつる

になとや―(直) ナシ ○夢はかり―(慶・京) ナシ

26ウ ○御こゝろやすくおほしめせ―(直) ナシ

27オ ○国綱かはからひにてはかなひ候ましい―(慶・京) 国つな一人がはからいはかりにてはおもひもよらず、(直) 国綱かはからひにてわ努々かなひ候まし

27ウ ○一人ならぬなけきを―(毛・直) 一人ならぬ生涯を

28オ ○めしをかれ候修行者は：かの修行者か娘は―(直) 召置れたる修行者か娘は ○津の国―(慶・京) たとへばつこの国

29オ ○たとへは父かいのちにむすめかかはらんと申を―(慶・京) さりながらちよがいのちにむすめかかはらんと申を ○一人あはれみ―(慶・京) 三十人のひとばしちを一人あはれみ ○我か宿にまかりかへり―(毛) ナシ

29ウ ○かくするほとに―(毛・直) 既に、(慶・京) かくて ○人は

しらの―(直) 此島の ○三十人の人柱をろうより籠に入させ―(慶・京) ナシ

30オ ○うていこかれ―(慶・京) たもとにすがり ○中く申すはかりもなし―(毛) 目もあてられぬ次第なり、(慶・京) めもあてられぬふせひなり

30ウ ○かなはぬ道―(慶・京) さひこのみち ○みつからとも―(他本) 我もろ共に

31オ ○上総のかみ―(毛・東・松) 上総の守此由を御覽して、(直) 上総守此由を見玉いて

32ウ ○ゆるさせたまひさふらへや―(直) ナシ

33オ ○あゝらいたはしの御ありさまや候―(慶) ナシ ○かくては―(毛・直) さりなから角ては、(京) かくてはいよく

33ウ ○業と成なんことこそ何よりもつてかなしけれ―(毛・慶・京) 業と成なんかなしさよ ○御前にかしこまり―(毛・直) ナシ、(慶・京) 庭上にかしこまり

34オ ○中々御返事までもなく―(毛・京・直) 浄海聞しめされて中く御返事までもなく

34ウ ○庭上にひれふし―(毛・直) ナシ、(慶・京) ていしやうにかしこまり ○つくく―(毛・慶・京・直) ナシ

35ウ ○とつくしつめよ―(毛・慶・京・直) 時刻移せは歎きありとつくしつめよ ○浄海の御内に―(毛・直) ナシ ○ことく

―(毛・東・松・直) 皆々

36ウ ○かくやとおもひ知られたりー(他本) 是にはいかてまさるへ

き

37ウ ○洛中洛外よりもー(直) ナシ

(はま出)

去間頼朝は上落まし／＼て、大仏くやうをとけさせ給ひ。御身は左近の右太將に経あからせたまひ。兵衛つかさ十人。左衛門つかさ十人。廿人の官途を申。此比忠の人々にをの／＼下したひ給ふ。梶原平藏景時に左衛門つかさをくたされければ、嫡子の源太にゆづる。源太つかさを給はり。ひろめ申さて有へきかとして。大名小名を調請申。もてなしかしつき奉る。「サシイロ」しよばんの日のざつしやうに。蓬萊の山をからくみ。「イロ」中に(1オ)

甘露の。酒をいれ。「コトハ」ふしの薬と名付。白かねのさはに。こかねのつるべをく／＼りさげ。「カ、ルフシ」はねつるべにて是をくむ

〔同〕酒にあまたの。いとくあり。うとき人さへちかつく。したしき中は着したしう。遠近のたつきもしらぬ。旅人になるゝもさけの。いとくなり。蓬萊の。山の上には。李夫人か橋けんほのなし。さふふのしいかぶくがゆ。とうがんせいの。栗とかや皆いろ。／＼になりつれて。其あぢ。はひはしゆみをなしまことふしの。薬そと酔を。すゝ(1ウ)

めて。舞あそふ。「コトハ」二日の日のざつしやうに肴の数をそつくされける。三日の日にも成しかは。江の幡詣にことよせて御はま出と

研究紀要 10

そ聞えける。御れうの北の御かた。御出有と聞えければ。大名達の北の方。皆御供をそ申されける。「カ、ルイロ」舟の上には。舞台を高くゆはせ。したんくわりぼくやりわたし。かうらんぎぼうしみかきたて。ふたひの上に綾をしき。「ツメ問」みつ引に錦をさけぬれば。浦ふく風にひようあうして。極楽浄土は。海の(2オ)

表にうき出ぬるとうたかはれ。をんがの舞有へしとてけんくわんの役をそさ／＼れける。ち／＼ふ殿の六郎殿は。笛の役とそ聞えける梶原の源太景末。太鞍のやくとそ聞えける。長沼の五郎は。とびやうしの役なり。御簾中には。ひわ三めん琴二ちやう。きんのことの役をは。北の御かた引給ふ。一面の琵琶をは北条殿の御内様上総のすけの御内様わこんをしらべ給ひけり。けんくわんいつれも。名にしおいたる上手なりぶたひの上の舞児(2ウ)

に。ち／＼ふ殿の次男に。氏若殿と申て。十三になり給ふじくわうそだちのめいどうなり。左の一とう請取ぬ惣して児は十八人。九人つゝに分ちて。ひだり右の。舞を舞給ふいつれも舞は上手也。れうわうに一おとりげんじやうらくのさし足。ぼとふの舞のぼちがへり。りんだいはには。さすかいな青海波にはひらく手。ことりしよにはがへし。いつれも曲をもらさす夜日三日そまふたりける。うつもまふもかなずるも菩薩の行是成けり。天人はあま(3オ)

くだり。龍神はうきあかり舟ぎやうどうにめくるらんげんもんかくちの聲。あきれて爰に立にけり。御まへの人々へは。御所傾給はり。所知入とこそ聞えけれ(3ウ)

一七

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(毛光)毛利家光治本、(毛片)毛利家片假名本、(内)内閣文庫本、(打)打波家本、(東)東大本、(松)松村本、(京)京都大学蔵一本、(慶)慶応大学蔵伝小八郎本

1オ ○たひ給ふー(慶・京) たひにけり ○ひろめ申さてー(慶・京) 国にくだりてひろめ申さて

1ウ ○栗とかやー(毛片) 栗と

2オ ○肴の数をそつくされけるー(慶・京) 鎧はらまき太刀かたな名馬のかすをそろへをもひくひきわたしなさけをかけてぞし
いられる ○三日の日にも成しかはー(慶・京) 三日の日のさつしやうに ○御れうのー(毛光・毛片・内) 忝も御れうの、
(打) かたしけなくも、(東・松・慶) ナシ ○大名たちのー(慶・京) ひとくの

(清重)

去間判官殿武蔵をめして仰けるは、諸国の武士の中に、義経に心さし
のせつなき方も有へし。いそぎ廻文をまはし頼ふてみんなの御錠なり。
武蔵承り、御錠尤然へう候とて、状を書て参らせければ、判官御判を
すゑさせ給ふ。さて此状を誰やの者にふれさすへき。誰々と申とも。
伊勢の三郎義盛。駿河次郎清重。かれら二人そ候らんと申す。急二人

を召れ。いかにかた／＼此状を。諸国の武士に見せてたべ。万事頼む
と(4オ)

仰ければ。二人の人々承り、世間のていを相見るに。合戦は頼て候へ
し。同じくさふはとままつて御供せんと申す。判官聞召れて。軍の供
をせん事も。此廻文をまはさんも。もつてはひとしかるへし只たのむ
との御錠也。此上力及はずとて。山ふしの姿にさまをかへ。笈に御判
をかくし持「カ、ルフシ」高館殿を出にけり「同」かりそめなか
ら。別とは後。にそおもひ。しられたる「コトハ」かくて二人の
人々は。上野下野かい信濃。常陸下総安房上総。武蔵の国に打(4
ウ)

こえ。ちふ殿を始申。七党の人々に。御判を拜せ奉り本田の宿にそ
出にける。義盛申けるやうは。中道こえに駿河の国に出んと云。駿河
次郎か是をきふ。日本に花の都は。日の本のだいじやう。但當時は。
猶かまくらか花やかなり。新京たりときいてあり「サシ」四十に及
ふ清重か。聞ふる名所を見さらんは。不覚の至りと存するなり「フ
シ同」此次而に。鎌倉を一目。みはやと。申けり。よし盛か。是を
きふ。か程の大事を持ながら。遊山見物むやくなり。もしも此(5
オ)

事目出度で。奥かまくらの。御和平あらは。見あかふする鎌倉を。然
へくは。駿河殿直に。伊豆へと申けり。清重聞て腹をたて。かからん
やうの為にこそ。さまをかへたる色見ゆれ。諸国一見山伏の。いかは
と多く通らん中に。駿河計かあやしめられんは清重計か運さふか。御

身は一とせ鎌倉へ。下り上りを重くして。見しれる人も有ぬへし。い
つくと相図をさし給へ。頼て追付申さんと。いるまの宿を上りに。か
まくらさして行程に。力及はず。義盛も(5ウ)

同道申たけれ共。仰のことく某は。大略人の。見しりたり。駿河の。
国なる。竹の下にて待申さん。とく追付せ。給へやとて。義盛は伊豆
の国。駿河次郎は。かまくらへ行。わかるゝそ。最後なる。「コト
ハ」去間清重は二また川鶴か峯。雲井か岡を遙々と打詠。けわい坂に
打あかり。かまくら内を見わたせば。「カ、ルフシ」心詞も及はれず

〔同〕あら面白の。鎌倉や。神宮寺の。松風は旅人の夢や。さます
らん。ふつかくむねを。ならへつゝ。民の在家は軒つゝき。八七郷に。
築地の(6オ)

敷。以上八百余門也。油井のはまに大鳥井。いつみかやつに。いゝ嶋
は名にしおふたる。名所かな。將軍の御所をまん中に。東むきにそ立
られける。諸大名の。在鎌倉。日夜朝暮の番すかふ。ゆゝしかりける
御果報かな。哀我か君判官を。か様にいつき申さてと。思へはたけき。
清重も涙。こぼるゝ。計也。「コトハ」其夜は若宮殿に参籠申。夜も
すから現世安穩後生善所ときねんして。明ければさこそ義盛か。竹の
下の宿にて待らんもの(6ウ)
をと思ひ。いそけはすでに音にきく片瀬川にそ着にける。懸りけり処
に。梶原の源太景末は。五十七騎の其せいにて。やき鳥狩して帰りし
か。河中にてむすと行合たり。日比見えし事そかし。あやしめられ
ては叶はしと思ひ。笠をかたむけ清重はさらぬ跡にて通りしに。運の

きはめのかなしさは。ならへの風か。一もみはつともふてきて。清重
かきたりける。笠緒をづんと吹切て。「ツメ同」ときんとつれて河へ
落ういつしづんづなかれけり。清重これを(7オ)

みて。さかやき人に見しられ。かなほしと存すれば。鈴懸の左右の袖
を。さつとかさひて。笠をおふてそ走りける。弓杖二つへ三杖にて。
程なく追付候らひて。ぬれたる笠を打かけてさらぬ跡にて通りけり。
源太目はやきおのこにて。爰に通る山伏の川風に笠をとられしか。ひ
たひを見ればさかやきの。白く見えつるあやしきよ。山ふしならば通
すへし。やうあらはめしとれとて。かけ足早き駒ともに。めんめに鞭
をもみそへて。いかに爰元を通り給ふ(7ウ)

山伏に。物申さんと云まゝに我もくくと追かくる。むさんや清重は。
一足なれ共弓取の。敵に後をみする事。不覚の至りと存すれ共。君の
御判と。国々の人々の。お請の判共の。あらはれんする悲しさに。耳
にも更に聞入す。もみにもふでぞ走りける。五町計にげのびて。小高
き所に走り上て笈をひつたとおろし。おいのかた箱より。火打付竹と
り出し。ちやうくと打付て。御判とお請の判共を。せつなに焼て捨
たりしは。剛なる上の早態かなとほめぬ(8オ)

人こそなかりけれ。其後大せい取こむれば。三尺八寸の。いかもの作
りするりとぬいて。まつかうにさしかさし。大音あげて名のるやう。
いかにかたくか見とかめたるも道理なり。判官殿の御内の侍。駿河
次郎清重と。申者にて候か。ぎけいの御意に違ひ申おくをは出され参
らせて。二張の弓を引しため山伏の姿にさまをかへ。諸国一見まはり

しか。うんか尽て源太に。見相ぬれは力なし。今にをいて某。判官殿の御内に。あるなしなんと。ちんばうをすへき身(8ウ)

にてもあらはこそ。四国九国の戦にも。駿河次郎か振舞を。見ても聞ても有つらん。そこを引なと云まゝに大せいの中へ割て入。散々に切たりけり。手もとにすゝむ兵者を。廿七騎切ふせ。大せいに手をおふせ東西へはつと追ちらかし。剛のものゝ自害のやう見ならへ源太と云まゝに。太刀のまん中おつとつて。腹十文字にかき切て。卅八と申には。片瀬川にてうたれたる彼。駿河次郎清重をほめぬ人こそなかりけれ「コトハ」去問源太は。若堂あまたうたせ(9オ)

けれ共。清重かくびを取。なゝめならずに悦て。頼朝の御目にかくる。頼朝くびを御じつけん有て。義経か郎等の首ならば。油井の汀に掛よとてはまのがうにそかけられける。扱も義盛は。竹の下のしゆくにて。約束の日数をいかにまて共をそかりけり。余り不審に存すれば。道行人に事のやうを尋はやと思ひはや海道にそ出にける。かゝりける処に。二人つれたる旅人の。義盛を見るよりも。山伏を見申せはおとゝいの事の哀さよ「サシ」人間有為のならひ(9ウ)

とは申せ共。弓箭にかゝるゝこそ「フツ同」歎の中の。なげきよとかり。捨てそ通りける。よし盛か。是をきゝ。やうありけなと思ひて。急追付候らひて。袂を取て。ひとつゝめなふ。いかやうなる山ふしか。何となりて候そ。我等がやうなる。ものならばきかま。ほしやと。申けり「コトハ」旅人聞て申やう。さん候判官殿の御内成。駿河二郎清重と。申人にて候らひしか。義経の御判をかくし持。国をふ

れてめくられしか。鎌倉を出てこなたなる。かた瀬川云所にて。梶原の源太に見合ぬれは力なし(10オ)

。笈ふみやぶりがた箱より。火打付竹取出し。ちやうくと打付て。御判とおほしき巻物をせつなに焼てすて給ふ。其後大せい取罷れば。うち物をぬきもつて。そこはく人をほろほし。我が身も腹を切給ふ。くびをはとつて鎌倉へ。上せられて候を見まいらせて候そ。山伏とこそ申けれ「サシ」義盛聞あへす。さばかり某か申つる事を用すして。扱はうたれて有けるそや。かくと申て某か。おくへ廻下るならば「フツ同」いか計。判官の御心ほそく。おほすへき。とてものがれぬ(10ウ)

。朝顔の。日影をいとふ。ふせいにて。奥州くたりもよしなやとて。あくれば宿に。いとま乞竹の。下をそ。出にける「コトハ」それよりも義盛は。駿河の国に。吉川舟越高橋たう。遠江の国に。横路かつまた井の八郎。三河の国に。あすけ東城星野ぎやうめい。尾張の国に。ほんぶ海東熱田の大官司。原の四郎に。御判を拜ませ奉りすでに京へそ上りける「カ、ルツメ」たそかれ時の事なるに「同」備中殿のかゝりのまへを。笠をかたふけ義盛はさらぬていにて通りけり。番の(11オ)

兵者是を見て。夜暗に通る山伏は。やうありて覚えたり。笠をぬかれ候らへとて。一度にはらりとおり立たり。よし盛是をみて。不覚なりかた／＼。それ山伏の習にて。峯渡りをする時は。木の葉をしき。木の根を枕と仕り。よるをも昼をもきはぬ行。出羽のはくろの。山伏

か熊野へ参るとこたへたり。番の兵者是をき。なんの山ふし。行にてもあらはあれ。笠をぬかれ候らへとて。義盛かきたりける。しら打でのかさを。引落して見てあれは。あんの内の義盛(11ウ)

なり番の兵者共。一度にどつと笑ひ。道理にて御身は。よるはとをり給ふ也。あますまいと云まゝに大せいの中に取こむる。むさんやなよし盛は。おい焼ひまのあらされは。はら／＼とふみ破り。かしこへかはとなけ捨。笈の足にゆい付たる。一尺八寸の。打刀するりとぬいて。まつかふに指かさし。大音あげて名乗やう。いかにかた／＼か見とかめたるも道理なり。判官殿の御内の侍。伊勢の三郎義盛なり。君の御運尽させ給へは我等までものかれへす。但当家の番の者。あはぬ(12オ)

かたぎと存れ共。弓取の死所をは定へす。そこを引なと云まゝに大せいの中へわつて入。散々にきつたりけり。手もとにすゝむ兵者を。十七八騎切ふせ。大せいに手をおふせ東西へはつとおつちらかし。剛のものゝ自害のやう見ならへやつと云まゝに。刀のまん中おつとつて。腹十文字にかききつて。四拾三にて討れたる。義盛かふる舞。ほめぬ人こそなかりけれ(12ウ)

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(打) 打波家本、(松) 松村本、(慶) 慶応大学蔵伝小八郎本

4オ ○めして仰けるは諸国の武士の中に―(慶) めされいかにへん

けいうけたまはれよしつねはくはんとうのらいてうにやしんをぞんぜすといへともかづはらがざんそうによつてすてにうつてむかうときくしよこくの武士ともの中にも ○武蔵承り御旋尤然へう候とて―(打) 弁慶承り ○誰々と申とも―(打) 弁慶承りたれ／＼と申とも、(慶) ナシ ○万事頼むと仰ければ―(打) ナシ、(慶) くはいふんをまはしたのうてみんとの御旋也

4ウ ○世間のていを相見るに合戦は頓て候へし―(慶) 御旋もつともにてはさふらへともかせんはやう／＼ちかつきぬ ○軍の供を―(慶) それはさることなれどもいくさのともを ○此上―

(慶) 二人の人々うけたまはり此うへは ○上野下野かい信濃常陸下総安房上総―(松) 上野下野安房上総常陸下総安房上総ひたち下総か(打) 奥ちかき国に(ミセケチ) 上野下野安房上総ひたち下総か
ひ信濃

5オ ○ちゝふ殿を始申―(慶) ナシ ○中道こえに―(松・打) これよりも中道越に ○猶かまくらか―(慶) 都より猶鎌倉が

6ウ ○諸大名の在鎌倉…ゆゝしかりける御果報かな―(慶) ナシ
○明ければ―(慶) ナシ

7オ ○いそけはすでに―(打) 〱笈とつてかたにかけ〱(補入) いそけはすくに、(慶) あげければをひとつてかたにかけいそけはすてに ○通りしに―(松) とをりけりかゝりける処に、(打・慶) とをりけり

- 7ウ ○かなはしとー(打・慶) あしかりなんと ○左右の袖をー(慶) ゆんての袖を
- 8オ ○むさんや清重はー(松・打) 去間清重 ○走りけるー(松・打・慶) にげにけり ○にげのびてー(打) 行すき
- 8ウ ○三尺八寸のー(慶) おいのあしにゆいつけたる三尺八寸の ○まつかうにー(打) みつけんに、(慶) みけんに ○申者にて候かー(慶) 清重也
- 9オ ○散々に切たりけりー(慶) 西から東北から南くもてかくなは十文字やつはなかたといふものにさん／＼にきつたりけり ○廿七騎ー(慶) 三十七騎 ○去間源太は……頼朝の御目にかくるー(慶) 源太はなめによるこふて清重かくびをとりいそきらいうにまいりこのよしかくと申あぐる
- 9ウ ○御じつけんー(打) 御覽 ○扱もー(慶) あらむざんや ○道行人ー(慶) こうぢへたち出みちゆき人に ○尋はやー(松・打・慶) とはばや ○旅人のー(打・慶) 旅人の京のかたへのほりしか
- 10オ ○よし盛か是をきゝー(慶) よし盛はきくよりも ○義経の御判をかくし持国をふれてめくられしかー(慶) ナシ
- 10ウ ○うち物をぬきもつてー(慶) うちものをしらくぬきもつて ○山伏とこそ申けれー(慶) 山ふしとてそとをりける ○義盛聞あへすー(慶) よし盛このよしきくよりも ○扱はー(慶) うちこへさては ○いか計ー(慶) ナシ
- 11オ ○あすけ東城ー(慶) あすけのちうでう ○原の四郎にー(慶) 山田の左衛門みのゝ国にはときとを山ひらのゝ次郎蜂屋のくわじやあしゝの次郎あふみの国に西郡佐々木柏木木村の源三に11ウゝ12オ ○よし盛是をみて……大せいの中に取こむるー(慶) ナシ
- 12オ ○まつかふにー(打) みつけんに、(慶) みけんに (俊寛)
- 爰に門脇の平宰相乗盛。おりをえて小松殿に参りおとゞに申されけるは。いかに大臣きこしめされ候らへ。まことや承候へは。今度きさきの宮の御入胎に。ひじやうのだいしやおこなはるへきよしうけ給はる。是は何にもすくれたる御きたうなり 「サシイロ」それ人のなげきをとめさせ給はゝ。身の(13オ)
- よろこひも有へきなり。其上丹波の少将なり恒平判官康頼。法性寺の執行か事。よきやうに御はからひあつて。今度の内にしやめんあらせ給はらは。いかゝはめてたく候らひなん。先思ひても御らんせよ 「フシ同」薩摩かた。いはふか嶋のうき住る思ひやるさへふひんなり 「コトハ」小松殿聞しめし浄海に参りて申さんとて。相国にかくと仰ければ。相国きこしめされて。いさとよ執行は。随分浄海かこうじうによつて。仁と成しものそかし。それにことふれ(13ウ)
- 。今度ひかし山鹿の谷のむほんに。当家を安からす悪口しけるとときくこそぎつくわひなれ執行が事にをいては。まつたう浄海は知るへから

す。小松殿うけたまはり。御説もつともにて候らへとも始より同罪にて。一所のしまになかされ。しやめんるときかれ一人をめしのこされ候らは。猶つみふかき罪科たるへし。たゝおなし次而とそ申されける。相国きこしめされて。いや／＼しゆぎやうか事にいては。まつたく浄海はしるへからすと大きにいかり給へは(14オ)

。此うへちからをよはすとて。八条殿を御出あり。かどわきの屋形にうつらせ給ふ。あくれば七月九日。さつまかたいわうかしまの流人は。丹波の少将成恒。ならひに平判官康頼。兩人の御教書。八条殿よりも出ければ。十日の逗留にて。おなし廿日に使京をたつ。されはさつまかたとは惣名なり。おく七嶋は唐土の内。口五しまは日本。さうしてしまは十二。はしめは白石かしま衛か嶋いわうか嶋とて。三つのしまへ一人つゝ。なかさるへきにて(14ウ)

ありし。かとも門脇殿の御訟訴のふかきによつて。三人ながら召集。さつまかたいわうか嶋へそなかされる。ある時此人々三人あまりのとせんさに。いさやしまめぐりしてあそはんとて。嶋めぐりをこそし給ひけれ。「サシ」実や都にてつたへ聞しよりは。はるかにこえて覚えたり。いぬゐよりたつみへ長山つらなつて。百千万のいかつちの音たえず。峯にはらいでん隙もなし。ふもとの里に雨ふりて。「フシ同」むかしは鬼か。住ければ。鬼界か嶋とも申なり(15オ)

。今は又何となく。嶺にいわうか立ければ。さつまかた。いわうかしまと。申なり。たま／＼。此嶋に住人は。我かすむ国の人にかはり。我いふ事をかれ知らず。かれいふ事をわれしらす。おとこはあれとも

えほしきす。女はあれともかみさけず。賤か山田を。かへさねはべいこくの種も。なかりけり。そのくわをとらされはけんはくのたくるもなかりけり。水をむすばんとては。沢にくたり。こたら木をとらんとてはさんりんに入てまよひけり。明暮(15ウ)

月日を。送りけるう。き身の程こそ。かなしけれ。「コトハ」されとも少将の為に御しうとてまします。門脇の平宰相乗盛の所領。肥前の国かせの庄なりければ。少将一人のいしやう食事を。日にしたかつてをくらせ給ふ。一人のいしやう食事もつて。二人の人をそはごくみける。判官入道少将。ひとつ心にの給ひけるは。我等みやこに候らひし時は。熊野を信し申。五度つゝ参り今五度参り。十度にたさんと思ひしに。此しまになかされ。しやめんも(16オ)

なくてつゐに。しまのつもりと成はてんする事の口おしさよ。「イロ」実やらん権現はわれをねんぜん衆生のあらは。「コトハ」いかならん野のすゑ山のおくにも。ひかりをさして道びかんと。ちかはせたまふしようけ給はる。たとへ此しまにありとも。三の山を祝申。帰洛を権現にいのり申へしして僧都はいかゝおほしめす。僧都きこしめされて。山王の御事ならはしかるへし。権現の御事はさしもしんじんは候らはす。「サシ」此うへちから(16ウ)

をよはすとて。二人すこ／＼とおたちあり。まん／＼たる海上を見わたし。峨々とある磯辺をめくり。「フシ同」三の御山に。にたる所をたつねけり。あるひは山たかふして。じやうすい久しくなかれいづ。或は。木々の木すゑ。れい／＼としてそばだてり。こゝは本宮せうじ

やうでん。かしこは新宮かんのくら。はるかの。きたにあたりつゝ白石のがどとあるよりも。れうすい雲よりなかれ出。松のあらしのかみさび。ひれう。権現のおたちあるなちのお(17オ)

山に似たりとて爰をなち。とそさためけり。「コトハ」津の国くほつ王子よりも。九十九所の王子くを。かたのことくくわんしやう申。それよりくろめにお下向ある。そのまに僧都は。高き所にあかり。東西南北を見わたし。よろつくわんねんしてましくけるに。「イロ」黒雲あつくへたつて。石岩くづれうみに入。その時僧都。まへにふるき詩をおもひ出る。「サシ」風仏前に。花をさんす。岸崩れてうほがいす其きし。こゝろなくして(17ウ)

つみをえず。「コトハ」されは。五躰は五つのかりもの。「カ、ルモンタイ」地水火風をかたどり。こゝろは空のことくにてかたちなけれは色もなし。諸法は有無の二道にて。ありとも見え。又はなし。「フシ同」たつても。居てもさぜんなりとはかひむざんの。高枕しおきぬ。ふしぬそし給ひけり。「イロクトキ」此うへちからをよはずとて。二人又すこくとくろめをおたちあるか。日かすつもつてたちかふへき浄衣のあらされは。あさのころものしほにくちたるを沢の(18オ)

水にてあらひ。岩田川のきよき瀬にてぼんのふのあかをすゝぎ。五だひわうしをふしおかみ。それよりも山路に上りければ。「フシ同」たかはらや。嶺のあらしに。さそはれて。いわふをこして。参るにそ中。天ちくもとをからす。じうてうちかつゆくませ川。発心門にも。入ぬ

れははや。本宮に。つきたまふ。「イロコトハ」あら有かたや是こそほんぐうせうじやうでんにてましませ。「カ、ル」いさや我等かのつとを申。きらくを権現にいのり申さんとて。さんまひ(18ウ)

のあらされは。はまの真砂をしほにあらひ。さんまひとさため。花を手折てごへいにさゝげ。きらくののつとをを申されける。「イロ」さひはひ。く。「サシイロ」これあたりきたれる。さいし治承二年つちのへいぬ。月のならひは十月二日のかす三百五十余か日。吉日りやうしんをえらんでかけまくもかたしけなくまします。日本第一だいやうげん。熊野三所権現ならひにひれうだいたつたのけうりやう。うずのひろまへにして信心の大施主。うりん(19オ)

藤原のなりつね。ならひに沙弥少将一心しやうくのまことをいたし。さんがうさうおりの。こゝろさしをぬきんてつつしんでもつて。「ヨミモノ」うやまつて申。それせうじやう。大ぼさつは。さいとくかひのけうしゆ三しんゑんまんの。かくわうたり両所。権現は東方淨瑠璃。いわうのしゆ衆生しつちてうの如来たり。あるひは南方ふたらく。のうけのしゆにうちうげんもんのたいし若王子は。しやばせかひのほんしゆせむいしやのたいし。ちやうじやうのぶつ(19ウ)

めんを現して衆生の諸願をみてしめたまふ。かるかゆへに上一しんを。はしめ下方民に至る迄。あるひは現世。安穩又は後生善所のために。あしたにはじやうすいをむすんで。ほんなふのあかをすゝぎ。ゆふへには深山にむかつて。ほうがうをとなふるにかんのうおこたる事なし。かどとある嶺の。高きをはしんとくの高きにたとふけんくとある谷

の。ふかきをはぐぜいのふかきになそらへ雲を。分てのほり露をしのいでくだる爰にりやくの(20オ)

ちをたのますんばいかゝあゆみを。けんなんの道に。はこはんや権現のとくを。あふがずんはなんぞかならず。しもゆふえんのさかひに。

ましまさんやよつてせうじやう大ごんげんならびにひれう。大はさつしやうれいじひの御まな。こをならへさうしかの。御耳をふりたてわれらか無二のたんせいをちけんして。いち／＼のこんしを納受。しせしめ給へまくのみ所。権現はをの／＼きにしかつてあるひはうゑんのしゆじやうを道引又は無縁(20ウ)

の。くんないを。すくはんかために七ほうしやうごんのすみかをはなれ。八万四千のひかりをやはらけかりにすいしやくとげんじ六道三途の。ちりにどうじたまへり。かるかゆへにぢやうごう。やくのうてんぐちやうしゆ。とくちやうしゆらいはい袖をつらねへいはく。れいでんたてまつる事ひまもなし。にんにくのころもをかさね。かくたうの花をさゝけ。神殿の床をうこかししゝんの水をすまひてはりしやうの池にたゝへたり。しんめいなふしう。まし(21オ)

ましまさは諸願なんそじやうじゆ。せざらんやねかはくは十二所権現りしやうのつはさをつらねて。はるかにくうかひ。の空をかけつてさせんのうれいをやめきらくの本懐をみせしめ給へさいはひ／＼とらいはいして。淨衣のたもとをしほるは。有かたくこそきこえける(21ウ)

【校異】

本曲で使用した諸本は次のとおり。(毛)毛利家本、(内)内閣文庫本、

(直)直熊本、(東)東大本、(松)松村本、(京)京都大学蔵一本

13オ ○いかに大臣きこしめされ候らへまことや承候へは(毛・内

・京)いかに大臣聞召せ、(東・松)いかにおとゞきこしめせまことや承り候へは、(直)ナシ

13ウ ○平判官康頼(諸本)ならひに平判官康頼 ○よきやうに御

はからひあつて(直)ナシ ○仰ければ(毛・内・直)まふさせ給へは、(京)申されければ

14オ ○今度(諸本)ナシ ○うけたまはり(毛・内・直・京)

聞召し 御説もつともにて(毛・直)御説にては ○いや／＼(京)ナシ

14ウ ○唐土の内(毛・内・直・東・松)唐土

15オ ○さつまかた(京)ナシ ○あまりのとせんさに(直)あつまりとせんさのあまりに

16ウ ○成はてんする事の口おしさよ(毛・内・直)なりはてなん事こそ口惜けれ、(京)成はてん事の口おしさよ ○帰洛を(毛

・内・直・松・京)我等か帰洛を

17ウ ○まへに(毛・直・京)禅に、(内・東)ぜんに、(松)前(ぜん)に

18オ ○空(毛・内・直・松・京)虚空、(東)くう

20オ ○かんのうー(京) 寒温

21オ ○たてまつる事ー(他本) 捧る事

(新曲)

情以にいにしへより今にいたるまで。朝敵を一時にほろほし。泰平を四海にいたす事武略のこうにしくはなし。されは近代は。異国しうらいの恐もなく。帝位をあらそふかたもまします。これ併武運の天命にかなはせ給ふによつてなり。爰に元弘建武の昔を思ふに戦場にしてかはねをさらすのみにもあらず。或は君臣の義を守て。身をさうかいの波にしつめ。或はいもせの別をかなしんで。思ひを古郷の月にいたましむる。中にも(1オ)

哀なりしは。一の宮の御息所の御事と右衛門の府生兼の武文か振舞なり。それをいかにと申に。その比みやすでに初冠めされ。深宮のうちに仁とならせ給ひしかは。御才覚もいみじく。容顔もよに勝れまし。しかは。定て春宮に立せ給ひなんと世の人ときめきあへりしに。関東のはからひとし。思ひの外後二条の院の御子。春宮にたよせ給ひしかは。こなたに参りつかへし人々も皆きを失ひ。宮もよろつに付。打しほれたる御気色(1ウ)

にて。たゞ明春は詩哥に御心をよせ。風月に思ひを添させ給ふ。折に付たる御あそひなど有しかとも。さして興させ給ふ事もなし。さるに付てはいかなる宮腹。一の人なんと御娘なりともかくと仰出されは。御心をつくさせ給ふ迄の御事はあらしと覺しに [サシイロ]

御心にそむ色もなかりけるにや。是をとおほしめしたる。御けしきもなく [フシ同] たゞひとりのみ。年月を送らせ給ひ。けるとかや

「コトハ」ある時関白家にてなまかんだちめ殿上人あつ(2オ)

まり。絵合の有けるに。洞院の左大将殿の出されけるゑに。源氏の優婆塞の宮の御姫。柱にゐかくれて。琵琶を引給ひしに。雲かくれたりつる月の。俄にいとあかくさし出たれば。扇ならでも招つべかりけりと。髪を上てさしのぞきたるかほつき。いみじくうたげに。にはやかなるけしきを。いふはかりなく筆を尽してそ書たりける。官是を御らんして。限なく御心にかゝりければ。此絵を暫し召置れ [サシイロ] 見るに花(2ウ)

かたもやと。巻返し御覽しけれ共。御心さらになくまます。むかし李夫人の甘泉殿の床にふし。はかなく成給ひしを [コトハ] 武帝かなしみにたえず返魂香をたかれしに [クトキ] 李夫人の面影のかすかに見えしを。にせ絵に写して御覽せしに [フシ同] ものいはず咲ず。人愁殺と武帝の歎給ひしも。ことほりかなと今さらに。思ひそしらせ給ひける我なから。はかなの心迷や。まことの色を見てたにも。世は皆夢のうつつとこそ。思ひ捨へき事成(3オ)

にこは何のあたし。心そ [コトハ] 花山の僧正。偏照を貫之か。哥のさまはえたれともまことすくなし。たとへは絵に書る女を見て。徒にこゝろをうこすかことしと。古今の序に書たりし。其たくむにもなりぬるものよと。思ひ捨させ給へ共。猶あやくなる御こゝろ胸にみちてそ思召す。されはかたへの色ことなる人を御覽して。御目をた

にも懸られず。まして時々便に付て。事問かはされし御方へは。一村雨の雨やとり立よらせ給ふへき御心(3ウ)

地もなしせめて世の中に。さる人ありと伝聞し召れて。御心にかゝらは。玉たれの隙求る風の便も有ぬへし。又はつかに人を見し計の御心あてならは。水の泡の消かへりてもよるせはなとかなかるへき。是は見しにもあらずきゝしにもあらず。昔のはかなき物語。あたる筆のあとに。御心をなやまさされければ。せんかたなくおほしめし煩はせ給ひて。月日を送らせ給ひける。せめて御心をやるかたもやと。御車に召れ。賀茂のたゝすの宮へまふてさせ(4オ)

給ひ。御手洗河に御手水召れ何となく河に遺遺せさせ給ふ。「サシ」むかし葉平か恋せしと御秘せし事の。哀なるやうに思召。出て。「イロ」いのるとも。神やはうけん影をたに。みたらし川の。ふかき思ひを。「クトキ」かやうに打ずんじ給ふ時しも村時雨の過行程。木の下露に立ぬれて御袖もいと。ほしあへす。「コトハ」日もはや暮ぬと申こゑに。「サシイロ」御車を轟かして。一条を過させ給ふに。「フシ同」たかすむ宿とはしらね共。垣に。苦むし瓦の松も(4ウ)

年ふりて住。あらしたる宿なれば。物さひしげなるその内に。發音。けたかく青海波をそ。引ける。「コトハ」あやしや誰成らんと思召し。過がてに御車をとめ。はるかに見えさせ給ひたれば。見る人ありとも知らずして。有明の月の雲間より。ほのくゝと指出たるに。御簾たかくまきあげ。いとあてやかなる女房の秋の別をかなしみ。「カ、ルツメ」琵琶を。弾するにてそ有ける。「同」節珊瑚碎一両曲。氷玉盤

に落千万声。「フシ」かきみだしたる其こゑは。庭の(5オ)

。落葉にまかひつゝ。よそには降ぬ。村雨にそでも。しほるゝ計なり。「コトハ」官御目もあやにつくゝと御らんせらるゝに。此ほどそとるに御心を尽し。夢にもせめて見はやと。恋かなしませ給ひしにせゑに少もたかはす。猶あてやかなる御すかたはいわん方なくそ見えたりける。宮御こゝろ空にあくかれ。たどゝしき程になりしかは。

御車よりおりさせ給ひ。築山の松の木陰に立よらせ給ふに。女見る人ありと。ひわを几帳のかたはらにさしをき。内へ紛れ入に(5ウ)

けり。「サシイロ」引やもすそのあからさまなる面かけに。又立出る。方もやと。「コトハ」夜ふくる迄立休らはせ給ひたれば。あやしげなる御所侍の。みかうしおろす音して。はや人皆しつまりければ。かくて有へき事ならねは。宮も還御成にけり。絵に書たりし形にたに。御心をなやまさされし御事也。ましてまことの色を御らんして。いかにせんとこひかなしませ給ふもことほりなり。それよりひたすらなる御けしきに見えなから。さすか御詞には出されず。常に御会に(6オ)

参ける。二条中将為冬。いつそやかもの御かへさの。ほのかなりし宵の間の月。又も御らんせまほしくおほしめさるゝにや。其御事ならはいと安き事にて候。此女房の行末をくわしく尋て候らへは今出河の左大臣。公頭公か娘にて候を。徳大寺の左大将に申名付ながら。いまた皇太后宮の。みくしげにて候なる。せつに思召れ候は。哥の御会にことよせ。かのていにうつらせ給ひ。玉垂の隙も。自御心をあらはず御事にて候らへかしと申ければ。官例(6ウ)

ならず御心よげに打笑せ給ひ。さらは今夜彼事にて。褒貶の御会へきよし。左大臣の方へ仰つかはされければ。公顯公忝と取きらめきて。教寄の人あまた招よせ。案内を申せば。為冬の朝臣計御供にて。かのていこうつらせ給ふ。哥の御事は今夜さまでの御本意ならねは。披露計にて褒貶はなし。主の大臣こゆるきの急。御土器持て参たれば。宮常ならず興せさせ給ひ。鄙曲絃歌のたえく御盃たはせたるに。主もいたく酔ふしぬ。宮も御枕を(7オ)

かたふけさせ給へは。人皆しつまりて夜すでにふけにけり。媒の左中将は心ありて酔さりければ。かれに案内せさせ。かの女房の住ける。西の亭へ忍ひいらせ給ひ。かいまみ給へは。灯の幽なるに花紅葉ちりみたれたる屏風引まはし。おきもせずねもせぬさまにしほれ臥つ。たゞ今人々の語たりし。哥の短冊取出し。顔打傾たれば。「カ、ルモンタイ」こほれ懸りたる鬢のはづれよりくにはやかにほのかなる顔はせく露をふくめる花の露く／＼かせにしたかへる柳の夕の色(7ウ)

〔フシ同〕絵に書とも筆も。及びかたかくかたるに。詞もなかるへし「コトハ」よ所なから似に見てしすかたの。世に又類もやあらんすらんと。あやしきまでに覚しは。猶數ならさりけりと御らんせらるゝに。御心もはやほれく／＼と成て。しらず我が魂も。その袖の内に入ぬらんと。思召るゝ計なり。おりふしあたりにもなく。灯さへかすかなるに。妻戸をすこしおし明。内へいらせ給ひたるに。女驚かほにもあらず。のどやかにほのかなる。やをらきぬ引かつき臥たるけはひ

云しらすなやかなり(8オ)

・宮もかたはらによりふさせ給ひ。ありしなからの御心尽し。哀なる迄に聞えけれ共。とかくいらへも申さす。たゞ思ひしほれたる其気色まことに匂ひふかふして。花かほり月霞なきよの手枕に。見果ぬ夢の御心まとひに。あくるも知らず打かたらはせ給へとも。猶強面気色にて。つゆほともなびかぬさまなるに。八こゑの鳥も告渡り。なみたのつらくとけやらぬ。をのかきぬくひやゝかに。類もつらき有明の。つれなき影に立帰らせ給ひぬ。其後より度々(8ウ)

御消息有て。いふ計なき御文の數。はやちつかにも成ぬらんと。覚ゆる程に積りければ。女もあはれなるかたに心引れて。「サシイロ」上れは下る船舟の。いなにはあらずと覚ゆる気色になん。あらはれたり「コトハ」され共互に人目を中の関守にて。月来過させ給ひけり「片ツメ同」有時式部少輔英房といふじゆしやをめし。ぢやうぐわんせいようをよませてきこしめされしに。昔唐の太宗。ていじんきが娘を。こうひの位にそなへて。元和殿に。かしづき入んとし給ふ(9オ)

をぎてふいさめて申様。此女はずでに。りくしにあくせりと奏し申たりければ。「カ、ルフシ」太宗其いさめに隨ひて。宮中に召るゝ事は止給ひきとだんじけり。「コトハ」みやつくく／＼と聞召し。いかなれは昔の君は。かく賢仁の諫に付て。色をこのむ心を捨給ひけるそや。如何成我なれば。已に人に云名付事定まりぬる中をさげ。人の心を破るべきと。昔のためしを取。よの磯を思召て。たゞ御こゝろの内には。

いかにせんと恋かなしませ給へ共(9ウ)

御詞には。出されず。文たに書たえたれば。女も百夜の榻のはし書も。今は我や教かゝましと打怍て。海土のかるもに思みたれて。互に月日をそ送らせ給ひける。徳大寺此事を伝承り。左様に官の思召たらんを。いかてひんなふさる事の有へきと。早あらぬかたに通ふ道ありと聞えければ。官も今は御傳なくて御ふみをつかはさる。「下イロ」いつよりも。黒み過て。「サシ」しらせはや。塩やく浦の。けふりたに。思はぬ風に。なびくならひを。「イロ」女も余りにつれ(10オ)

なかりし事。我なからつらき心かなと。思ひ返す程に成しかは詞は。なくて。「下」立ぬへき。うき名を兼て思はずは。風に煙の。なびかさらめや。「フシ同」其後より。かなたこなたにむすはれ。心の下ひも打とけて。さよの枕をかはしまの。水の心も。浅からぬ御中とならせ。給ひけり。「コトハ」生ては階老の契りふかく。死ては同じ音の下にもと。思召かはして。十とせにたらさるに。天下の乱出来て。一の宮土佐の畑へながされさせ給へは。みやす所は独り都に留まらせ(10ウ)

給ひ。て明事歎しつませ給ふ。「サシクトキ」せめてなきよの別成せは。うきに絶ぬ命にて生れあはん後の契りをも頼むへきに。是はまだ同じ世なからうみ山をへたて。互に風の便の音信をたにもきかせ給はず。年比召仕はれし。青侍官女の一人も参り通はず。「フシ同」よるつ音に。かはりたる世とこそならせ。給ひけれ。住あらしたる。蓬生の宿の露けきに。御袖のかはく障もなく。おもひくつおれ給ひて。

いかて涙の玉の緒も。なからへぬらんとわれ(11オ)

なから。あやしき程にそ思召す。官も都を御出より。君の別御身の上。一かたならぬ御歌。みやす所の御名残。今をかきりと思召す。道の草葉の露霜と。消はつるとも惜からしと。思召さるゝ御命の。なからへてつれもなく。土佐の畑と云所の。浅ましげなるはにふのこや。此世のうちとも思はれぬ。浦のあたりにうつされて。月日を送り給へは。晴るまもなき。御歌たとへんかたも。ましまさず。おもひくつおれ給ひしを。御いたはしくや思ひけん。御誓固(11ウ)

に候らひし。有井の庄土。情ありてすゝめ申ける様は。何かはくるしう候へき。みやす所を忍ひやかに。是へ下し参らせて。御心をも互に御なくさめ候らへと。色ある御きぬ一重。調進申て其外に。道の程の用意まで懇にさたし申ければ。官はよろこひ思しめし。唯一人候らひし。泰の武文を御迎にそ上せらるゝ。武文御ふみ給りて。急都へのはりしに。幾程なきに御座所。見しにもあらずあれ果て。葎茂りて門をどぞ。松の葉積りて道もなし(12オ)

。音信かはす物とては。古き梢の夕嵐。軒もる月の。影ならては住人もなく荒はてたり。「コトハ」扱はいづくにか立忍はせ給ふらんと。かなたこなた御行姿を尋けるに。嵯峨の奥なる里に。松の袖垣ひまあらはなるに葛はいかゝり池の姿も物さひしく。汀の松風秋すさましく吹落。たか住やらんとみるも。ものうげなる宿の中に。琵琶を弾するをとしけり。あやしやと思ひ。立とゝまりて是をきくに。まかふへくもなきみやす所の御歌音なり。武文(12ウ)

余りの嬉しさに。中々案内をさへ申さず。垣の破より内にいり。縁に畏りたれば。破れたる御簾の御うちよりも。遙に御らんし出されて。あれやとはかり御こゑ幽に聞えながら。「クトキ」何とも仰出さるゝ事はなくて女房達さゝめきあひて先なく声のみそ聞えける。「コトハ」武文宮の御使に罷上り是迄尋参りて候と申もあへず。えんに手打懸てさめくんとそ泣るたりける。良有て只是迄とめさるれば。御簾の御まへにひざまづき。雲の外に(13才)

思ひやり進するも。余りにせんかたなき御事にて候らへは。いかにも田舎へ。御下り候らへとの。御使に罷上りて候とて。御ふみを捧げれば。いそぎ披て御覽せらるゝに。「クトキ」実も御思ひの切成色さこそと覚て。「フシ同」ことの葉ことにをく露も御袖にあまる。計なり「コトハ」よしやいかなるひなの住るなりとも。そのうきにこそたえめとて。頓而御門出有ければ。武文かひくしく御輿など用意し。先尼か崎まで下し参らせて。渡海の順風をそ相待ける(13ウ)

。懸りける処に。築紫人に。松浦の五郎と云ける武士。京より田舎へ下るとて。是も同しく此浦に風を待てるたりしか。垣の隙よりもみやす所を見参らせ。こはそも天人の此土に天降れるか。此よの人とは覺すと。目かれもせず守りるたりしか。あなあちきなや。縦ぬしある人にてああれ。又はいかなる女院姫宮にてもおはせよ。一夜の程の情に。百年の命をかへん事何かおしからん。うはひとつくだらばやと思ひける処に。武文か下部の。浜のかたへ(14才)

出てあそひけるを呼よせ酒のませ引出物とらせ。さても御へんか主の

具し奉る上臈は。いか成人にて有やらんとといければ。下臈のはかなさは。酒に酔引出物にめで。事のやうを有のまゝにそ語ける。松浦大さきよろこび。いかなる宮にてもおはせよ。けふこの比の謀叛人にて。流されさせ給ふ人のもとへ。忍ひて下り給はんする上臈を。道にて奪取たらんは。さして罪科は有ましきと。心の内に存すれば。郎従共に宿の案内見置せ。日の暮るをそ(14ウ)

相待ける。夜すでに深ければ。松浦か郎従卅余人。物具ひし／＼とためて。たい松に火をたて。「ツメ同」葎遣戸をけやふつて前後より打てそ入にける。秦の武文は。京家の者とは云ながら。日比手からをあらはして。人にすくるゝ者なれば強盗入たると心得。枕に立たる太刀おつとり。中門さいて切て出。すゝむ敵を三人。手の下に切ふせ。

残る敵を大庭へ。一度に颯と追出し。大音あげて名のるやう。右衛門の府生。秦の武文と云大剛の者爰に(15才)

あり。とられぬものをとらんとて。二なき命を。失ふ者のはかなざよと。のつたる太刀を押直し門の脇にそ立たりける。松浦か郎等共。武文独りにきりたてられ。門の外へそ引たりしか。きたなし敵はたゝ一人そ。かへせ／＼といふまゝに。そはなる家に火をかけて。をめきさけんでよせにけり。武文心は猛けれ共。煙を風に吹かけられ。かなはしと思ひけん。内へはしりかへつて。みやす所をおい参らせむかふかたきを打払ひ。湊の舟を招きつゝ。いかなる舟にて候とも。此(15ウ)

上臈をしはらく。のせてたべと呼はつて。波打際にそ立たりける。舟

共多き其中に運のきはめのかなしきは。松浦か舟に是をきゝ一番にこそはさし寄けれ。武文なゝめによろこぶて。屋形の内にのせ奉り。御供の女房達を舟にのせんとおもひて。走りかへつて見てあれば有し宿には火かゝつと。我か方様の人々は。行方知らす成にけり。其隙に松浦は。此上臈のわか舟に。召るゝ事は偏に。天の与ふる所也。急舟にのれやとて。家の子郎等百余人とる (16オ)

物をもとりあへず。皆舟にこそそのつたりけれ。とも綱とて押出す。

武文渚にかへつて。舟はととへはなかりけり。見れば沖にそうかんなるなふその舟よせられ候へ。屋かたの内にのせ奉る。上臈をあげ申さんとこゑをはかりに呼はれとも。順風に帆をあくれは。舟は次第にへたゝりぬ。武文余りの無念さに。海士の小舟に打乗てみつから櫓をおしていそけ共。おい手をえたる太船に。おつつくへきやうあらされは。扇をあげて招けるを。松浦か舟に是をみて瞳 (16ウ)

とわらふこゑしけり。武文。やすからぬものかな其儀にてあるならば。たゝ今海底の。龍神となつて。その舟にをいては。やるましきものと怒て。舟のへ板につつたつて腹十文字にかき切て蒼海の底にそ入にける。「コトハ」舟の内なる者共か。このよしを見るよりも。あつはれ大剛の者かな。主の女房を人にははれ。腹をきつするあはれさよなんと云けるを。武文か事やらんとは聞召しなから。そのかたをたにも見やらせさせ給はず。綱引かつき屋形の内に (17オ)

。なき臥てまします処に。見るもおそろしき。むくづげなるひげおとこの。こゑいとなまりて。色のあくまてくるきが。御そばに参り何を

かさのみむつからせ給ふそ。おもしろき道すから。名所とも。うらゝをも御らんして。御心をもなくさませ給へ。さやうにてはいかなる人も。舟には酔ものにて候ととかくなくさめ申せ共。「サシイロ」御かほをももたげさせ給はず。只鬼一くるまにのせられ。ふの。三かうにさほさすらんも。是には。過しと覺し。「コトハ」むくづげ男も忙然となつて (17ウ)

。是さへあきれたる躰なり。その夜は大もつの浦にいかりをおろし。よをうら風に漂給ふ。明れば風よく成ぬとて。同じとまりの舟共も。帆を引かぢをとり。をのがさまゝ漕行は。みやこははやあとのかすみにへたゝりぬ。九国へはいつかゆきつかんすらんと。人の沙汰する

をきこしめし。さてはこゝろ筑紫に行たびなりけりと。御こゝろほそきに付ても。北野の天神の。荒人神とならせ給ひし。其いにしへの御心うさ。おほしめし知らせ給はゝ我を都へかへしたまへと (18オ)

。御こゝろの中にいのらせ給ふ。「カ、ル」その日の暮ほとに。阿波の。鳴渡を過けるに。「ツメ同」俄に。かせかはりしほ向て。此舟さうなく行やらす。舟人驚き帆をついで。ちかきうらによせんとすれば。沖津塩あひに。大の穴出来て舟を。海底にしつめんとす。水主梶取共。いかゝはせんと周障て。帆席蓬をなげ入て。うずにまかせてその隙に。こぎとをさんとしけれとも。舟かつてはたらかず。うずのまふにしたがつてなみともにくる事は茶臼 (18ウ)

をおすよりも速なり。是はいかさま竜神の。財宝に目をかけられ。なやますとおほえたり。何をもうみへ入よとて。鍙はらまき太刀かたな。

敷を尽して入れれとも。襲のまふ事猶やまず。もしも色ある衣裳にや。目を見入てもやあるらんと。御息所の御きぬと。赤き袴を入たれば。白波色変し紅日をひたせることくなり。是にうずはしつまりけれ共。舟はおなしところにて。三日三夜そめくりける。船中の人く(19オ)

一人もおき上らず。皆ふなそこに酔ふして前後もしらずぞ見えにける。「クトキ」御息所はさらたに。生たる御こもちもなきうへに。

このなみのさはきにいと御きもきえ。今ははや人心地もまします。よしや生てうき目を見んよりは。いかならんする洲瀬にも。身をしつめはやとこそはおほしめしつれとも。さすがに今をかきりと。泣叫こ糸をきこしめせば。「フシ同」ちいろの。そののみくつとなり。ふか

きつみにしつみなん。後の世を。たれかはしり(19ウ)

てとふらふへき。羨ましきよと。おほしめす御こもろの内こそ。あはれなれ。「コトハ」松浦も惘然となつて。かゝるやんごとなき貴人をとら奉り下るゆへに。龍神の咎もあるやらん。せんなきわさをしつるものかなとけに後悔の気色なり。かゝりける処に。ふなそこよりもかんとり一人。遣出て申けるは。此鳴渡と申は。龍宮城の東門にあたりて候ひし間。何にても候らへ竜神のほしからせたまふものを。うみにしつめ候らはねは。いつもかやうのふしき(20オ)

ある所にて候。是はいかさま屋かたの内に。めされて候上臈を。龍神のおもひかけ申されたりとおほえ候。申も中く邪見に。いたはしくは存すれとも。この御事ひとりの故に。若干のもの共か。非分のしにをつかまつらん事。ふ便の次第に候らへは。この上臈をうみにしつめ

申。百余人の命を。御たすけ候へかしと申ければ。松浦もとよりなきけなき田舎人なれば。さてももしいのちやたすかると。屋かたの内に参り。みやす所をあらゝかに引おこし(20ウ)

奉り。あまりにつらき御けしきをのみ。見まいらせ候も。本意なく存候へは。うみにしつめ申へきにて候。御契りふかくは。土佐のはたへなかれよらせ給ひて。宮とやらんだりとやらん。ひとつうらにすませ給へと。播抱まいらせて。うみにしつめ申さんとす。是ほとになりては。「サシクトキ」何の御ことはか有へきなれば。つやくいきをも出させ給はず。只御こもろのうちにはほとけの御名はかりねんじおほしめして。はやたえいらせ給ひぬると見え(21オ)

たり。「コトハ」かゝりける処に。僧の一人便船し給ふか。松浦かたもとをひかへ。こはそもいかなる御事ぞ。龍神と申すも。南方無垢の成道をとげ。仏のしゆきをえたるものにて候らへは。まつたくさいこの手向をは受へからず。しかるを生ながら。人を海にしつめられは。いよくしんいかつて。一人もたすかるもの候まし。たゞ御経よみたらにをみて。竜神の法衆にそなへんこそ。真実のいのりともなるへけれど。かたく制分し給へは。松浦もさ(21ウ)

すかいわ木ならねは。実もとやおもひけん。みやす所を屋かたのうちら。あらゝかになげ捨奉り。さらは。僧の儀に付ていのりをせよとて。「カ、ルツメ」船中の上下。「同」異口同音に観音の名号をとなへけるに。ふしきなるもの共か。海上にうかみ出てそ見えにける。先一番に。退紅の仕丁か。長櫃をかひて。とをると見えて打うせぬ。その

次を見てあれは葦毛なる駒に白くらをき。八人の舎人が引てとをると見えて打うせぬ。ヤムしはらく有(22オ)

て。大物のうらにて。腹きつて死たりし。棄の武文。火威の鎧に五枚甲の緒をしめ。黄月毛成馬にのり。弓杖にすかつてみなくれなるの扇をあげ。松浦か舟にむかつてとまれ／＼と招ひてなみのそこにそ入にける。「コトハ」梶取ともか是を見て。なだをはしる舟にふしきの見ゆるは。つねの事にては候らへとも。これはいかさまたけふんが怨靈とおほえて候。其しるしを御らんせんため。かこを一艘引おろして此上臈をのせ申。波の(22ウ)

上につきなかして。龍神のごゝろを。如何と御らんし候へかしと申ければ。此儀尤しかるへしとて。小舟を一艘引おろし。「サシクトキ」水主一人と。御息所を乗申。さばかりうずのまきかへる。なみのうへにそうかべけるかの。「フシ同」早利速利か海岸山にはなたれて。帆察のうれいにしつみしも。それは人すむ嶋なれば。立よるかたもありぬへし。是は浦にも嶋にもなく。いかなるとの波の上。身をすて舟の。うきしつみ。しほ瀬にめくる。水の淡のきえなん(23オ)

事こそ。かなしけれ。「ツメ同」されは竜神もおもはぬ中をはさけられけるにや。風俄にふきわけて。松浦か舟はにしをさしてふかれ行と見えけるか。一の谷の沖にて。武庫山おろしにはなされて。行かたしらすたよひしか。げきらう舟をくつがへして。そのみくづとなるとかや。其後なみ風。「フシ同」しつまれは。みやすところの。御舟はむしまにつかせ。給ひけり。「コトハ」かのしまと申は。釣する海

士の家ならては。すむ人もなき所なればひまあらはなる(23ウ)

芦の屋の。うきふししけきすみかのうちへそ入たてまつりける。「クトキ」この四五日のなみ風に。御心もよりははて。やかたえいらせ給へは。「コトハ」こゝろなきあまの子ともまでも。こはいかにしたてまつらんとなきかなしみて。「クトキ」御かほに水そまきなんどし。やう／＼生出させ給ひけり。「フシ同」なにしにうきいのちの。そのまゝにたえもせで。又うき目をみん事よと。なげかせ給へとかいぞなき。さらでだに。なみだのかゝる御袖は。かはくまもなき折からに(24オ)

。とまもる雫あら磯の。岩にくたくる。なみの露きえをあらそふ。ふせいなり。「コトハ」御息所はいつまでかくてあり能へき。土佐のはたとやらん云浦へ。をくりてもあれかしと打わびさせ給へは。海士とも申けるやうは。かほとうつくしくわたらせへ給ふ上臈を。われらか舟にのせ申。はる／＼と土佐まで送り申候はんに。いつくの津とまりにてか。人のうばひとり申さぬ事の候へきか。ゆめ／＼かなふまじき由を申せば。ちからをよはせ給はず。なみの立るに御(24ウ)

袖をしほらし。今年はこゝもとにてくらさせ給ふ。御こゝろの内こそあはれなれ。さても一の宮は。かゝる事とはいさ／＼かしらせ給ふへきなれば。みやす所の御むかひに。武文を京へのはせられしち。月日はるかに成ぬれと。なにと御左右を申さねは。いかなるめにもあひぬやと。しつ心なくおほしめして。京より下れる人に。御たつねありければ。みやす所は去年の九月。みやこを御出あつて。畑へ御下り有し

とこそ。たしかに承はつ(25オ)

て候らひしかと申ければ。さては道にて人にうばはれけるか。又は世をうら風にはなされて。千尋の底にもしつみぬるか。一かたならずおほしめしわつらはせ給ひしに。ある夜御けいごに候らひけるぶし。中門にとのゐして。よも山の事共を物語しけるに。有ものゝ申けるは。さるにて去年の九月。阿波のなるとを過。当国へわたりし時。舟の楫にかゝりたりしきぬを。とり上て見しかは。よのつねの人の装束とは覺す。うつくしかりつる事(25ウ)

よ。是はいかさま内裏院の上臈女房などの。いなかへ下らせ給ふとて。難風にあふて。うみにしつみ給ひし。そのしやうぞくにてぞあるらんと語て。穴あはれやなど申あひけるを。みやものごしにてきこしめし。去年の九月ならば。もしその行ふにてもやあるらんと。おほしめされける間。聊か御覽せられたき事あり。そのきぬいまだあらはもちてまいれと仰ければ。色こそそんじて候へとも。わたくしに候とて。召出して参らせければ。みや是を(26オ)

御らんするに。みやす所の御むかひに。武文を京へのほせられし時。有井の庄司かてうしん申たる御綱なり。あなふしきやとて。裁のこりたるきれをめし出して。さし合たるに。綾のもん少違はずつどきたれは。「クトキ」なにの御うたかひかあるへきなれば。みや二目とも御らんぜず。この綱を御顔におしあて。なきしつませたまへは。「フシ同」あり井も御前に候らひしか。なみたをおさへて罷たつ。みやす所を今ははや。此世にまします人とは(26ウ)

。露もおほしめされずし此綱の楫に懸りし日をなき人の。忌日にさためられ。みづから御経あそばして。「サシイロ」過去幽霊。藤原の氏の女。ならびに泰のたけふんとも。三がひのくかひを出て速に九様んの。じやうせつにいたれといのらせたまふそ。あはれなる。「クセ」さるほどにその年より。諸国にいくさおこつて。六はらかまくら。九国北国の朝敵とも。同時にほろびはてしかば。「片ツメ」先帝は。隱岐の国よりも。くわんかうなり給ひ。一の宮は(27オ)

。土佐の畑よりもみやこへかへり入給ふ。天下ことくぐ公家一統の御世となり。めてたしとは申せとも。一のみやの御かたには。みやす所のおなし世に。おほしまさぬ御事をふかくなげかせたまひしに。淡路の武輪に御座あるよしを。風のたよりにきこしめし御むかひを下され。かくてみやこに着給ふ。たゝ王質か。山より出て。七世の孫にあひ。方士かうみに入て楊貴妃を見たりしもかくやとおもひしられたり。御息所はおもはずも。こゝろ(27ウ)

つくしにおもむきし御ありさまの心うさ。波にたゆたふうたかたのきえぬ身なからなからへ。二とせ過しもの思ひ御をしはかりも。猶あさくやと御袖をしほり給へは。みやは又とわたる舟の楫のはに書とも尽ぬ御なけきわかれのの中わかれとてなきあともひし年月の。数々つもりしかなしみたゝ身ひとつの物おもひしのびかねにしありさまをかたりつくさせ給ひけりさしもうかりし世の中のときのまに引かへて。人間の榮花(28オ)

。天上の娛樂。きはめずといふ日もなく。つくさずといふ御ゆふもな

し長生殿のうちには。利花の雨つちくれをやぶらす不老門のまへに。
楊柳の風えたをならさす。けふをちとせのはしめと。目出度ためしに。
あかしくらせ給ひけり(28ウ)

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(毛1) 毛利家元和元年本、
(毛2) 毛利家元和四年本、(打) 打波家蔵本、(藤) 藤井本、(直) 直
熊本、(慶) 慶応大学蔵伝小八郎本

- 1ウ ○よろつに付―(他本) 世中よろづにつけ
3オ ○我なからはかなの―(直) ナシ
4オ ○御心にかゝらは―(直) ナシ ○昔のはかなき物語―(直)
墓無昔の物語 ○御心をなやまさければ―(直) いたづらに御
心をなやまさければ
5ウ ○御すかた―(諸本) かたち
6オ ○はや人皆―(毛1・毛2・直・打・慶) 人みな ○かくて有
へき事ならねは―(慶) ナシ ○御心を―(毛1・毛2・藤・直
・打) いたづらに御心を
6ウ ○例ならず―(直) いつよりも(抹消)
7オ ○常ならず―(毛1・毛2・直・打) いつよりも、(藤・慶) つ
ねよりも
7ウ ○西の亭―(毛1・毛2・藤・直・打) 西の台、(慶) にしので

い

- 8オ ○よ所なから……ほれくと成て―(直) 宮つくくと御覽せ
らるゝに ○すかたの―(毛1・毛2・打・慶) 形の ○ほのか
なる―(毛1・毛2・藤・打・慶) もてなし
8オく8ウ ○おりふしあたり……立帰らせ給ひぬ―(直) ナシ
9ウ ○たゝ御こゝろの―(毛1・毛2) それより御心の、(直) 夫よ
りのちね(抹消) 御心の、(打) それより後に御心の
9ウく10オ ○たゝ御こゝろの……出されす―(慶) ナシ
10ウ ○十とせ―(直・打) 十月
11ウ ○思召さるゝ御命の―(藤) 御命の
12ウ ○ものうげなる―(毛1・毛2・藤・打) 中々物うげなる、
(直) 中々あさましけなる ○あやしやと思ひ―(毛1・毛2
・直・打) 武文あやししく思ひ、(慶) ふしきやとおもひ
13オ ○縁に―(他本) 縁の前に ○畏りたれば―(直) ひざまつき
たれば ○破れたる御簾の御うちよりも―(慶) ナシ ○武文宮
の御使に……泣るたりける―(直・慶) ナシ ○ひざまづき―
(慶) かしこまり
14オ ○下るとて是も―(毛1・毛2・打・慶) 下りけるが、(藤) く
だるとて、(直) 下りしか ○垣の隙―(毛1・毛2・藤・直・
打) 垣の破 ○垣の隙よりもみやす所を見参らせ―(慶) みやす
ところの御姿をかきの隙よりみたてまつて ○こはそも天人
の……何かおしからん―(直) ナシ

- 14ウ ○呼よせ酒のませー(毛1) よびよせ酒のませ(抹消)、(毛2・打) よびよせ、(直) ナシ ○さてもー(毛1・毛2) さもあれ、(慶) さて ○酒に酔ー(毛1・毛2・直・打) ナシ ○下臈のはかなさは酒に酔引出物にめで事のやうをー(慶) げろうのかなしさむひきでものにぬ(ミセケチ) で、 ○いかなる宮にてもおはせよけふこの比のー(毛1・毛2・直・打・慶) けふ此比いかなる宮にてもおはせよ ○道にてー(他本) ナシ ○心の内に存すればー(毛1・毛2・直・打・慶) おもひければ
- 15オ ○火をたてー(毛1・毛2・直・打・慶) 火をつけ ○部遣戸をけやふつてー(毛2) 部遣戸を踏破て、(直) ナシ ○強盜ー(慶) ちつともさはく気色なく夜うち
- 16オ ○御供のー(慶) 跡にのこる ○走りかへつてー(慶) いそきかへつて ○所也ー(慶) ところとてなふめならずによるこふて
- 16ウ ○扇をあげてー(慶) おもひのあまりにあふぎをあげて
- 17オ ○このよしを見るよりもー(慶) ナシ ○云けるをー(藤) 申あひけるをみやす所は、(直・打) 申あひけるを、(慶) いひさたするを ○綱引かつき屋形の内にてー(毛2) やかたの内にきぬひきかつき
- 17ウ ○おそろしきー(毛1・毛2・打) 中々おそろしく、(藤・慶) おそろしく、(直) 中くをそろしけなる ○むくづけなるひげおとこのー(毛1・毛2・打) むくつけげなる男の、(直) 男の ○ごあいとなまりて色のあくまでくるきかー(直) ナシ ○むくづけ男も忙然となつてー(毛1・毛2・直・打) 松浦も忙然と成て、(慶) ナシ
- 18オ ○是さへあきれたる跡なりー(慶) ナシ
- 19オ ○何をもうみへー(慶) いそき何をも
- 19ウ ○いと御きもきえー(毛1・毛2・直・打) ナシ ○今ははやー(慶) ナシ
- 20オ ○松浦もー(慶) むくつけおとこも ○とり奉り下るゆへにー(直) くしたてまつり下るゆえに ○けにー(毛1・毛2・藤・直) 誠、(打) まことだ、(慶) ナシ
- 20ウ ○いたはしくはー(慶) なさけなくは ○いのちやたすかるとー(毛1・毛2・藤・打・慶) 我命や助かるとおもひ、(直) 我命やたすかるとこゝろえ
- 21オ ○振抱きまいらせてー(他本) 情なくかきいたきまいらせて ○つやくー(慶) たゞ夢のやうにおほしめしてつやく
- 21ウ ○人を海にー(毛1・毛2・藤・直・打) 人をたちまち海に、(慶) 人をたちまち海底に ○へけれとかたく制分し給へはー(慶) へく候と申されければ
- 22オ ○あらゝかにー(毛2) ナシ
- 22ウ ○是を見てー(藤) 申けるは ○かこを一鞭ー(慶) 小舟を二そう ○波の上につきなかつてー(毛1) 浪上に突流し(傍書)、(直・打) ナシ
- 23オ ○此儀尤しかるへしとてー(直) けにくこれはいはれたりと

て、(慶)此儀もつともいはれたりとて ○しつみしも―(直)沈
みしもこれにふたりと申せとも ○いかになるとの―(毛1・毛
2)いかになるとの

24ウ ○御息所は―(慶)ナシ ○かほとうつくしくわたらせ給ふ上
臈を―(直)かゝる(抹消)上臈を、(慶)あれほとうつくしくま
します上臈を

25オ ○いさゝか―(毛1・毛2・藤・打・慶)いかでか ○かゝる
事とは……給ふなれば―(直)ナシ ○みやす所の御むかひに―
(慶)ナシ ○しつ心なくおほしめして―(慶)ナシ ○御出あ
つて―(直・打・慶)御立ましくて

25ウ 又は―(毛1・毛2)また、(直・慶)さらすは ○一かたなら
ず―(打)しつこゝろなく ○ぶし―(他本)武士とも

26オ ○内裏院の―(直)京かたの ○去年の九月ならば―(藤)ナ
シ ○おほしめされける間―(慶)御心元なくおほしめし ○聊
か御覽せられたき事ありそのきぬいまだあらは―(毛1・毛2・
直・打)其衣未あらばいさゝか御覽せられたき事あり ○召出し
て参らせければ―(他本)取出してまいらせあぐる ○是を御ら
んするに―(毛1・毛2・打)ねんごろに御覽せらるゝに、(直・
慶)つくくくと御覽せらるゝに

26ウ ○みやす所の御むかひに―(慶)ナシ
27オ ○此絹の裾に懸りし日をなき人の忌日にさためられ―(直)ナ
シ

27ウ ○公家一統の―(直)泰平の

(やしま)

去間判官やまふしのすかたをまなひ。下らせ給ひける程に。七十五日
と申にはるかおおく。佐藤信夫につかせ給ふ。判官武蔵をめされ。日は
陽国を出部州をてらし。漸々西山に懸りたまふ。いつくにてもしかる
へからん所にてやとり給へ。むさし承り。我が笈には若君を入申た
れば。亀井か笈に取かへ。れいしやくつかんて肩にかけ。爰にのほれ
は弓手にあたつて丸山ひとつそひへたり。かの丸山の麓に。むねかと
高き屋形あり(1オ)

。此家に立寄。宿とらはやと思ひ。堀の舟橋うち渡り。笈を梅花によ
せかけて内の躰をみたりければ。「クトキ」いにしへよしある人の住
たるか。住あらしたるとおほしくて。もんはあれとも聞なし。築地は
あれともおほいもなし。互も軒もくち果て。きうたいはかをとち
〔フシ同〕葎は。壁をあらそひて。軒の檜皮はこほれおち。ちりく
水はもり行とも結て。とむる。人もなし。扱ていを見てあれば。一て
うの琴に。一面の琵琶をは。たて(1ウ)

ならへては。置けれ共。曳人のあらされは。常に松風吹落て。さらり
とひかん。より外はひわ琴。しらむる。人もなし。むかしのかはらぬ
物とては。南殿のさくら。星の光り。月のひかりと日の光り。水の底
にて。としをふる蛙は。かりそ音をばなく。「コトハ」内の躰の痛は
しさに。宿とらふする事をはつたと忘れ。時を移して立たりしか。西

表を見てあれは。持仏堂とおほしくて法形作りの御堂あり。立よりお
かみ申に。阿弥陀の三尊(2オ)

と。めいよの人丸を絵膝にうつし掛。堂のあたりには。四せつの四季
をまなふ。「イロ」先東は春に似て。たいゆふれいの梅の花。むかし
なからの。山さくら。「コトハ」ふし見さへたの花までも。木々の梢
に咲みたり。鶯小陵鳥鶯の。軒端の梅に羽をやすめて音をたしかねた
るところには。「フシ同」けい／＼ほろ／＼の雉子の声。けいならば。
けいにてはなくして。なんそや後の。ほろ／＼の音いつも。春かと思え
にけり。南は夏にて。すわまに(2ウ)

池を。ほらせたり。池の其中に。蓬萊宝重えんしうとて。三つの島を
そつかせたる。嶋より陸路へは。輪橋をかけさせ。橋の下には。浦嶋
太郎か釣舟。東難管女か葱舟を五しきの糸にてつなかせて。常楽かし
やうの。風ふかは汀へよれと。つないたるはいつも。夏かと。見えに
けり。西は秋に似て。四方の梢も色つき。白菊たえぬ風情。北は冬か
と打見え。さんかくはか／＼とそひへたり。はいたんの翁は。をのか衣
は薄けれと(3オ)

。冬を待こそやさしけれ。冬。にもなれば炭をやく。すみかまの煙の
あ。をて細く。立のほるはいつも。冬と。見えにけり。「コトハ」あ
ら面白やと打詠。山伏のこゑたて。宿とる法のあらされは。腰に付
たるほらの貝の緒をときのへてむさし。宿とりの貝をふく。久しうた
てと人音もせず。人はなき哉覽と思ひ。立出んとせしとき。風も吹ぬ
に妻戸かなる。そなたをきつと見たりければ。「サシクトキ」六しう

に余り七しゆんにをよひたる(3ウ)

尼公の。朽葉の小袖かみにかけ。すいしやうの数珠つまくり。口に仏
語をとなへ。拾三人の山ふし達を。一々と御覽して。何と物をは仰も
なく。我か子の事を思ひ出して。先たつものは。涙なり。「コトハ」
承はれは御太将判官との。山ふしの姿をまなひ。此国へ御下向のよし
を申か。我か子の次信忠信。西国方にて討れすし。御伴申て下るなら
は。はにふのこやに立より。宿とりたつたるらんも。是にはいかてま
さるへきと。思ひまはせは小車のやるかたなきは(4オ)

心かな。いにしへの山伏達はよつれ給ふ時は五人。六人こそ御通り
有しか。此度は。上下十三人まします中に。「クトキ」少人も一人ま
します也。法は万法行は万行とて。万の行の中に山伏の行ほと物うき
事はよもあらし。あれ程いつくしく花のやうなる少人を。馬にものせ
申下れかし。さなくはわかき山伏の。肩にものせて下らすし。じやけ
んのまなごをふませ。申事のいたはしさよ。少人の父母の。国もとに
まし／＼て。「フシ同」さこそ。なげかせ給ふらめ。自か(4ウ)

明暮と。子共か。事を思ふにそ。いと／＼思ひの。かはらすとなみ。た
に。くれて。立給ふ。「コトハ」喃いかに山伏達。是は自か住荒して。
余りに見苦しうさふらふ程に。ふつつと御宿は叶ひさふらふまし。日
の暮させ給はぬさきに。他所にてお宿を召れさふらへ。武蔵聞て。い
や／＼此家にて宿取そんし。野宿取ては叶はしと思ひ。あらうたての
尼公の仰や候。一通り一時雨。一村雨の雨宿りも。百しやうのきえん
と承る。費長坊亭礼は。鶴の羽かひに宿を(5オ)

かる。達磨尊者は葦の葉にめす。張博望かいにしへは。浮木に宿をとるところ。承をよひて候へ。「カ、ル」我等計と思ひなはともねられぬ月の夜に。「フシ同」野に臥とても。力なし。御覽せられ候らへ。十羅刹女の。御跡をつかせ。給ふへき少人を。たゞ一人くし申す。ていまでかいやならば。軒の下の。御はうしのあるへ。きなりと。かりにけり。「コトハ」尼公きこし召れて。実々尤御道理。此里にて自かお宿参らせすは。たれやの人か心ありて参らすへ(5ウ)

き。こなたへ御入さふらへとて中のていへしやうせらるゝ。をのゝうつらせ給ひ。礼治懺法をたつとうあそはず。せんほう過ぬれば。瓶子一具蝶花形に口包ませ。「サシイロ」女房たちにしたかせ尼公出合せ給ひ。人の親の子を思ふ道程哀なる事よもあらし。子共か向後のきかまほしさに。自立出給ひて。行多も。知らぬ山伏達に。そゝろに酒を。しいられけり。「コトハ」酒も半なりし時。尼公むさしか袂をひかへ。なふ。昼御宿めされさふらひし時。都の人と仰さふらふ(6オ)

程に。吹くる風もなつかしうさふらふもし。御太将判官とのの御行ゑはししろし召れてさふらふか。夢はかりみつからにかりて御とをりさふらへよ。むさし聞て。扱は我が君の御下向か。遠国遠里にかくれもなく。とはするそと思ひ。尼公をはつたとにらんで。あらおかしの仰や候。山ふしの名は。よのつねおほしと申せとも。太将判官坊といふ山ふしの名をは。きいたりとも存せず。去ながら山伏は。五人は五国。十人は十国。しつたるかたもや候らんに。よのはうへ御尋さう

へ。此法師に(6ウ)

をゐて。はいさ知らぬざうとあひそうなけにこたふる。「クトキ」尼公きこしめされて実々尤御道理。人の行ゑを尋申とて。わか先祖をは申さすし。おかたりあれと申程にお話なきはことはりさふらふ。いてく自か先祖をかたつてきかせ申さん。是は兩國の秀平か妹。出羽の庄司か後家次信。忠信兄弟か。われは母にてさふらふそや。「コトハ」一とせ御太将判官殿。此国へ御下向あり。佐藤秀平催し。拾万余騎に著到付。御上洛の御とき(7オ)

。君はあのむかひに見えたる。丸山の麓に御陣をめす。妻の庄司さつしやうかまへ参らす。次信忠信兄弟。君の御供と申時。佐藤殿御覽して。いかに兄弟よ。西国への御伴は。国をへたてせきをこえ。はるくの道そかし。我又老体にて。子共か姿を二度。相見ん事もかたし。あに御供申さは。おとゝは国にとゝまれ。弟御供を申ならば。兄は国にとゝまつて。老体のちゝ母かならふするやうを見はてよ。兄か申けるやうは。御説尤にて候に(7ウ)

。忠信はとゝまり。父母をなくさめ申せ。なにかしお供と申す。又おとくか申けるは。おとなしやかに次信は。国にとゝまり給ひて。ちゝ母をなくさめ御申あれ。なにかしお供と申す。「クトキ」是かたとへかや諸仏念衆生。衆生不念仏。父母常念子子不念父母と説れ。もろくの仏は衆生を思ひ給へとも。衆生仏を思ひ申さす。高きもいやしきも。「フシ同」親は子を。思へとも子は親。をさらに。おもはず「コトハ」わかきものにてさふらふ程に。都を見んする事を(8

オ) うれしきと申。太刀よかたなよ。馬物の具と用意する。力及はず佐藤殿。白河二所の関まで。君の御供申。子共をかんにしよに近付。いかに兄弟よ。とても御伴を申ならば。命を全ふ高名をきはめ。佐藤か家の名をあげてたへ。西国の合戦は。おくの軍に似へからず。化生軍にて有間。かくるはやすけれ共。引か大事にあるときくそ。かけうする時も兄弟つれてかけ。ひかふする時も兄弟つれてひけ。まはらかけするな。城をおとさは(8ウ)

かさへまはれ。かさについておとさは。はるかの渚に下て。少河に付ておとせ。少河なかれは大河に出よ。大河に付て落さはやあかならず里に出へし。むら鳥立ならば。手負死人のありとしつて念仏申通れ。沖に白鷗をとつれは。かたきのせいと思ふへし。西国かたにて兄をうたせ。国本に候。父か見たふさう。母か見たひなんとて。兄か形見をとり持て。忠信国に下つて。「ツメ同」老した我をうらむるな。おとをうたせて。次信国へ下るなよ。「カ、ルフシ」かくは(9オ)いひてあれと花のやうなる。兄弟をしねとは更に。おもはぬそ。たし弓とりは。名こそおしう候らへ。人は一代名は末代名につゐたらん。其疵は末代。迄も。よもうせし。「コトハ」かまへて命をまたふ高名を究め。とのほらも名をあげ。庄司か名をも上てたへと。「クトキ」かやうに仰候て君に御いとま申。宿所にかへらせ給ひてのち。かれらか恋しき折々は。兄弟か植をきし花園に立出。常は粧給ひしか。明れは次信恋しや。くるれば忠信恋しや。こひし〜(9ウ)

との給ひし。恋風や積りけん。さて定業やきたりけん。「フシ同」一日二日と。すきの窓かきりの。床にふし給ふ。みつから余りの物うさに。いまた庄司。存生にありし時。兄弟のもの共に。毛ぎれのしたるよろひきせ。都へのほせ。たりつるか心に懸りおもふなり。よろひおとしたて。よろこはせんと思ふとて。兄の次信は。小桜をこのめは。こさくらおとしにけつこうす。さて弟の忠信は。卯の花をこのめは。うの花おとしにけつこうし。今やをそしとかのものとも(10オ)

。待しるしこそなかりけれ。あゝいたはしや。庄司との今をかきりと見え給ふ。自かなつさに。二両の物の具とり出し。二人のよめこに是をきせ。中門にたゞせ。次信参りて候そ。忠信参りて候そなふ。父こそと申とき。今をかきりの庄司殿。かつはとおきさせ給ひて。おかた達か姿をは。つく〜と御覽して。其いにしへの面かけの。あるとのみはかりにて今の。こゝろはなくさみぬ。三月の余波には。こさくらはかりやのこるらん。さて四月の。名こりには卯の。花(10ウ)計のこりけり。それ天竺のならひに。こひしき人の面かけを。みんと思ふ時には。せいせきさんにあかり。岩のかとを。たゝいてえきろの。鈴をふるとかや。太国のならひには。返魂香を焼とかや。扱我朝の。ならひには夢に。ならては見えはこそ。是はうつゝに面影を見つるうれしさよ。恋しの次信や。あら恋しの忠信と。是を最後のことはにて。朝の露と。消させ給ふ庄司にはなれて三とせなり。子共に別れ七年。なふ客僧との給ひて。たもとを顔に(11オ)

。押当てはら〜と。なかせ給ひけり。「コトハ」さる間判官御座を

たゞせ給ひ。弁慶をめされ。今まではいかやうのものとおもひてあれは。さてはなにかしか命にかはりたる。次信忠信兄弟か母にて有ける事よ。せめて二人に一人をも。くしつれ下りたる身にてもあらず。何のいみしさに。よしつねとは名のるへきぞ。さし心得て。かれらか最後所をも。よそなから見たていにかたつてきかせ。なくさめよかしと仰ければ。武蔵承り。御誕のことくふひんに(11ウ)

候。語て聞せ。なくさめうするにて候とて。ほんの座敷になをり。思ひよらざる物語を。二三つかたり出し。座しきの興を催し。たゞ今思ひ出したる風情にて。横手をちやうと合て。やあいたはしや候その次信とやらんの最後所をこそ。此法師か見て候らひしか。御望にて候らはゞ語て聞せ申さんと云。「クトキ」尼公きこしめされてあらうれしやさふらふ。かれらか向後をきかんに。とを物十。百もの百をなりともつてこそ御目に懸るへけれとて(12オ)

。巻絹三十疋武蔵かまへにつませらるゝ。扱又かれらか為に。おとし立たる物の具を。取出させ給ひて。なふこれ／＼御らんさふらへや。かれらかこひしき折々は。此物の具をとり出し。人にもきせ。かけてをき。是を見てこそなくさみしに。たゞ今参らせさふらひて。「フン同」明日より後の恋しさをな。にたよりてなくさまん。さりとは力なし。かれらか行ゑをきかんに。あすの事をも思はれず。いて／＼さらは参らせんと。二両の物の具の。わたかみ(12ウ)

つかんて引立て。むさし殿か。前にをく次信忠信の。忘かた見。妻の行ゑをきかんとて。砂金百両。みつなりの。橋かたにつませつゝ。よ

まのていに。いたき出て武蔵殿か前にをき。かみから。しもにゐたるまで。物かたり。きかんとてさん。こをひそめて。音もせず。「コトハ」さる間武蔵坊弁慶は。八嶋の磯の合戦を。始より終までことこまかにそ語りける。抑年号はいつなるらん。元暦元年比は三月下旬。四国。讃岐の八島の磯を通りし時。源平の(13オ)

合戦まつ最中と見ゆる。その時山伏六人さうしか。二人は見んと云。三人は通らんと申す。中にも此法師。かやうの事を見置てこそ。熊野に罷かへり。人にもかたる所と思ひ。笈をおろし。小松の枝にかけをき。はるかの渚にくたつて。源平の合戦をしつ／＼と見物す。日をきつと見たりければ。申の半の事なるに。沖の平家かたよりも。むいろ計なる。小船一艘。さゝめかいて押よするを見るに。人三人のつたりけり。一人は梶取。一人はわつは。今一人は(13ウ)

大将。たいしやうとおほしき人の。はたにはなにかめされけん。精好の大きくちの。そはたからかにおつ取て。卯の花おとしのよろひをめし。なし打鳥帽子おつこうて。白綾たゞんてはちまきにむすとしめ。ひやうとう作り五人張。しめのせきつるかけさせ。まん中にきりよこたへ。手矢計おつ取て。そうもんの渚へ舟を。さんさめかいておさす。くちかくなりしかは。ふなはりにつつ立あかつて大音上てなのられけり。たゞ今平家かたよりもすゝみ出たるつわもの(14オ)

をいかなるものと思ふぞ。一品式部卿。葛原の親王に九代のこうゐん。門脇殿の二男。能登の守のり経。そうもんの渚へ度々にをゐてむかふといへと。いまた。東国の太将に見参せず。東国の太将に見参とそな

のられける。源平なりをしつめて。名字名乗をたしかにきく。又源氏の陣よりも。大将とおほしき人の。すゝんで出させ給ふ。其日の御装束はなやかにこそ見えにけれ。はたには何をか召れけん。赤地の錦の直垂。火織の鎧(14ウ)

同毛の五枚甲に。くわかたうつて龍頭すゑたるを猪頸に召れ。こんねんとうの腰の物。二尺七寸の。こかね作りの御はかせ。あし緒長にむすんでさけ。廿四さいたる切符の矢。はづ高にとつて付。三人張のまん中にきつて長。七寸はかりにまつ黒なる馬に。金覆輪の鞍をかせ。御身かろけに召れたつしか。みかたの中を。しつづくとあゆませ出。相ちかく成しかは。鎧ふんはり。くらかさにつつ立あかつて大音声にて名のられけり。たゝ今ぢんとうにすゝみ出(15オ)

たる兵者をいかなるものと思ふそ。こともをろかや清和天王に十代のこうるん。源九郎よしつね。そもんの渚へ度々にをゐてむかふといへと。いまたのと殿とやらんに見参せず。のと殿ならば。花めつらしう見参とそ名のられける。能登殿聞し召れて。大将の御目に懸りたる。しるしなふて候へきか。小兵にて候らへ共。いつくと矢つほを承はつてつかまつらんと有しかは。源氏の大将。のかれかたくおほしめし。腰よりも紅に。ひを出したる扇をぬき。はら(15ウ)

りとひらき。胸板をほとくと音信。矢つほはまつほととぎうぞ。こゝの程をあそはせと仰けり。既に御命。あやうく見えさせ給ふ処に。又源氏の陣よりも。節繩目のよるひを着。あし毛の馬にのつたる。武威。一騎すゝみ出「ツメ同」君の。矢おもてにかけふさかつて大音声に

て名のるやう。たゝ今陣とうに。すゝみ出たる兵者を。いかなるものとおほしめす。奥州の住人佐藤の庄司か二人の子。兄の次信なり。のと殿の大矢を。まつたゝ中に請とめて(16オ)

。しんで焔魔のちやうにてのうつたへにせんと呼はりけり。のと殿此由聞しめし。あつかうなるつわものかな。一騎たうせんとは懸るものをいふらん。心さしの侍を。教経か手にかけて。射落してあれはとて。負ふす軍に。勝へきにもあらず。又たすけてあれはとて。かたふす軍に。まくへきにもあらず。心さしの侍を。たすけてこそとの給ひて。はけたる矢をゆるされけり。いしかつたる処に。わつはに菊丸かさゝへ申ける事はなふ。御誕にては候らへとも。次信(16ウ)

忠信は。剛の者にて候そ。それをいかにと申に。一の谷の落足。八嶋のおち足にも。爰にては次信。かしこにては忠信と名乗て。先帝女院の。御座舟をも恐れすして。さひ矢を射かけし狼藉人で候そや。其上軍陣にて。かたき一騎うたるれば。みかた千騎のつより。みかた一騎討るれはかたき千騎のつよりと。承はつて候そや。其上この者共は異国の樊噲長良を。あさむく程の仁でさう。軍神の御手向にたゝ一矢さうとさゝへてあり。のと殿(17オ)

此よし聞しめし。いしうも申たる。菊丸かな。其儀にて有ならはやあなかさし一筋とらせんと。十五束みつかけ。劔のやうにみかいたるを。五人張にからりとつかひ本筈うらはつひとつになれと。きりくと引しほり。まちおこふしに引かけ。えいやつとかつてうつたるはやあどうつきなんとのことくなり。一陣にすゝんたる。扱も次信か。胸

板にはつしと仲。血けふりかはつと立おし付へくつとぬけにけり。むさんや次信か最後はよかりけん。たうの矢いんすと。弓と矢(17ウ)を打つかつて。打立てひかんあふひかんはなさんと二三度四五度しけれ共。せいびやうの大矢にきものたはねはとをされつ何かはもつてこらうへき。弓と矢をはからりと捨。弓手の鑑けはなつて馬手へかつはと落にけり。今思ひ合すればや。御身の御子息かいたはしさよと申けり。「サシイロ」三人の孫二人のよめこ。尼公もちもに一度に。わつとさけひ給へは。ぎけいを初奉り。十三人の人々も。八嶋の磯の合戦をたゝ今。見る心地して。鈴懸の袂を(18オ)

。しほられけり。「コトハ」尼公泪をとゝめさせたまひ。扱なふ次信は其手にてはかなくなりてさふらふか。弟の忠信はさて何と成てさふらふそや。判官不便におほしめし。猶も語てきかせ。なくさめよかしと思召し。むさしか方を御覧すれば。弁慶やかて心得。あらむさんや次信。其後遠あさの事成しに。甲のしのひの緒かきれてたぶさは波にゆられぬ。のと殿のわらは菊王丸。次信かくび取て。見参にまいらんと。舟よりもとんでおるゝ。忠信(18ウ)

是を見ていや。兄のくひを。平家かたへ渡しては。あしかりなんとおもひ。四人はりに十四束。とつてからと打つかひ。よつひいてひやうといた。いさみにいさんておりたつたる。菊王丸か膝の口にし。たゝにあたる。大事の手なれはうけもあへず。いぬゐにどうとふす。忠信是を見てわつはかくびとつてあにの。教養に報せんと云まゝに。討物ぬいてさしかさし。ゆらりゝとよつたりけり。のと殿御覧して。

わつはかくひを。源氏かたへ渡しては。弓矢の恥辱(19オ)

そとおほしめし。舟よりもとんでおり。菊王か上帯かいつかんで。舟の内へ。ゑいやつと云てなけられたり。あらむさんや菊王丸。此手にて看病するならば。しぬましかりつる手なれ共。大ちからに舟のせかひに。「ツメ同」したゝかになけ付られて首みぢんにくたけて。終にはかなくなつたりけりことかりそめとおもひけれとも。源氏に侍うたるれば平家にも郎等しんたりけり。能登の守教経此よしを御らんして。透間かすへの忠信に。たゝ中とを(19ウ)

しては。あしかりなんとおほしめし。沖へ舟をおさせらるゝ。門脇の平宰相。のとのかみのりつねこそくがの軍にしまけてあり。教経うたするなやあつゝけ。兵者と仰けり。承ると申て。筑紫大名に。大伴諸卿。菊口原田松浦たう。これたうこれすみ戸次山住此人々をさきとして。七百余騎にすぎさりけり。舟一面におしならへや。馬ともをは。海上におつひて。ふなはらにひつ付ゝさゝめかひておよかせらるゝ。くがちかくなりしかは。駒を引よせ。ひた(20オ)

ひたと打乗て。一枚はきのわたり楯を。駒の頭につきかさして七百余騎かむれ高松へ一度にさつとかけあけたり。源氏二百余騎。おもての広きぢやうだて一めんにつかせ。矢ふすまつくつて。さし取引つけ。散々に射たりけり。平家の軍兵とも一さゝへもさゝへすして。落へざつと引にけり。悪七兵衛是を見て。にくしきたなし。かへせもとせとおめきさけんてかけにけり。源氏二百余騎。矢たねつくれば。討物の鞘をはつしわつと云てはかけ合。平家のお(20ウ)

はるゝ時もあり。源氏のおはるゝ時もあり。おうつかへしつ。かけつもとひつ。あふ。申の半より。酉の下りまでは。かけあひの合戦に。

源氏平家つかればはて相引にさつとひいたりけり。斎藤のむさし坊か此よしを見るよりも。是非某。一合戦仕り。見参に参らんとやあこのむところの長刀。水車にまわいて。斎藤の弁慶か。たゞ今懸るなり。平家かたの軍兵とも。にくしきたなし。かへせもとせと大こゑをあげてぞかけにける。平家の軍兵とも。弁慶か懸るときに(21オ)

中をあげてとをしけり。本より弁慶。かたきにあふてはやく事。猿猴か。梢をつたひ。いや。あら鷹かをやをくぶつて。雉子にあふかことくなり。大國の。しうちくわいば。かんこくのせきをやふつて。てきとにあふかことくなり。もとより武蔵腕の力は覚えたり。長刀のかねはよし。長刀をおつとりのへてむかふものゝまつかう。にくるものゝ。押付母衣付たかこし洞中。草摺のあまりを。あたるをさいはいにはらめかいてそぎつたりける手もとにすゝむ兵者(21ウ)

を。卅六騎。はら／＼と切ふせ。大せいに手をおうせ東西へはつとおつちらかし。長刀かたに打かけ。あふ。みかたの陣へ引たりける。武蔵坊かあり様はたゞ樊噲もかくやらん。「コトハ」平家の軍兵共。舟よりもあかりし時は。七百余騎とは見えしかとも。わづか二百騎あまりにうちなされ。おきへまはらにさつとひく。「サシイロ」源氏二百騎も八拾三騎にうちなされ。うりうもむさんにあかり。をの／＼陣とりしつまりければ。いぬゐの刻に。成にけり。「コトハ」判官武蔵をめされ(22オ)

。奥州の忠信はいつくに有そ。いそいてくして参れ。承ると申て御前を罷立。此辺に奥州の。佐藤殿やおはします。忠信はいつくに有そ。太将の召の有に。いそいて御参りあれとたつからかに呼はる。あらむさんや忠信。昼舎兄次信の。手負ぬると見るからに。合戦心にいらす。「イロ」とある山のはにそなた計を見送り。「コトハ」心ほそけにて立たりしか。太将の召と承り。武蔵とつれて君の御前に畏る。判官御らん有て。如何に忠信よ(22ウ)

。兄の次信か行ゑをは知らぬか。たゞ信承り。さん候あににて候もの。手負ぬるとは見候らひしかとも。かけ相のかつせん隙もなく。其行ゑをも存ぜすと申す。あふさそあるらん。いそひでくして参れ。今生にもあらはとふへき子細あり。しゝてもあらは教養よきにすへし。はやとく／＼との御説なり。忠信承り。あら有難や。御意下らすとも尋たく思ひしに。まして御説のうへ。おつとこたへて御前を立。「クトキ」乳母に信夫の十郎光遠を。供としてはるかの(23オ)

落に下りけり。比は三月廿日余りの事なれば。月はずして道見えす。「フシ同」涙そ。道のしるへなる。たちを杖につき。はるかの落に下りつゝ。昼の軍場を。此辺そと思ひて。むれ高松の。にし東洲崎の堂の北南落にそふて。尋けり。此辺に奥州の。佐藤とのやおはします。次信や。ましますとしつかにようでそ通りける。軍乱れの事なれば。手おい死人のふしたるは。算をみたしたごとくなり。手おい共のよふこゑ。耳にふれてそ哀なり。のり(23ウ)

こえ／＼。尋るにいとゞ哀そ。まさりける。むれ高松の事なれば。す

さきによする波の音。はま衛の友よふこゑ我を。とふかとおほしくて。心ほそさはまさりけり。あらむさんや次信は。大事の手おいて有けるか。おとくの忠信に。最後の名こりやおしかりけん。しにもやらすして。あげ舟のあたりに。下人の男に滅病せられてゐたりしか。忠信か声ときゝ。磯うつなみと。もろともにした。そよとこそ。こたへけれ

〔コトハ〕忠信するくよつて。いかに次信。御手(24オ)

は大事に候か。心は何とましますそ。いかにくと申。次信きいて。わか身の返事は何ともいはず。しはらくありて息をつき。やあ。君は御手はおい給はぬか。みかたはなんぎにうちなされたるそ扱。おことは手をもおはぬか。忠信承。さん候みかたはわつか。八十三騎にうちなされ候らひぬ。大将御手もおい給はず。なにかしも手も負候らはず。御心安おほしめせと申。次信きいてあふうれしいものかな。其儀にて有ならは。今生に息の通ふ時。大将(24ウ)

の御目にかゝりたきそくして参れ〔クトキ〕たゝ信なぬめによるこふて。急洲崎の堂よりも遣戸をとりよせて。次信をかきのせ参らせて

〔フシ同〕さきを忠信。かきければ跡をし。のぶぞかきにける。涙

そ道のしるへなる。むさし殿常陸殿。亀井片岡駿河殿。弓取と申すは。けふは人の上。あすは我が身の上そかし。いさや佐藤を見つかんと。はるかかの渚におり下り。次信をかきのせて。むれ高松にあかりければ。ひかしの山の端に。月。ほのくくと出にけり(25オ)

〔コトハ〕はやかいて参りたるよしを申上る。近ふかけとふへきしさあり。承ると申て御座まぢかくかきよせければ。忝も大将の御座を

よせさせ給ひ。次信か首をとつて。御ひさのうへにかきのせ給ひ如何に次信よ。心は何とあるそ。手は大事なるか。今生に思ひをく事あらはたゝ今申せ。明日にもなるならば。奥州へ人を下すへし。いかにくと仰けれとも。何と御返事をも申かね。打うなついたる計にて。胸の内によふこゑあり〔サシイロ〕わだちゝぶ左(25ウ)

右にしてあらむさんや次信。さこそ心剛なる武者とは申せ共。最後近付ぬれば力なし。ふひんなる次第かなとてをのく涙を。なかされけり〔コトハ〕跡にてかひしやく仕る。弟の忠信。手負に力を付はやと思ひ。あらゝかなることゑをあげ。あら浅ましの次信の御振舞や候。

たとへ事は候らはね共。鎌倉の権五郎景政は。とりのうみの弥三郎に弓手の眼をいられ。その矢をぬかて折かけ。三日もつてまはり。とうの矢をいおうせてこそ。今かまくらの。五領の宮とは。いはゝれ(26オ)

給ふとは承はれ。それ程こそはおはせずとも。かほとのはそ矢一筋に

〔クトキ〕左様にやみくくとよはり給ふか。忝も枕かみは三代さうおんのしう君。弓手はちゝぶの重忠馬手は和田の義盛なり。あとにてか様に申は。忠信にて〔フシ同〕候そや。何事をもかことをも。お前て申させ給へとて。さしもにかうなる忠信も。今の別の。かなしさ。権五郎景政は。その矢をぬかて折かけ。たうの矢を射おうせけるよなやあ(26ウ)

。それは薄手にてあれはこそ。三日もつてまはりつらめ〔クトキ〕

景政に次信かおとるへきにはあらねとも。のと殿の大矢は太国までもかくれなきに。たゞ中をとをされて次信にてあれはこそ。「フシ同」今迄も。なからへてお前てものを。申せぬ。何事もく。皆偽りとなるそとよ。国へ形見を下すへし。はだのまほりをは。老してまします父母の。二人に一人。なからへてもましますは。雪見ぬ。窓のおれ竹の。よはさかさまの。事なれとかた。見に是を。参らせん。びん(27オ)

のかみをは。若共か。母にとらすへし。鞭とゆかけをは。二人の若にとらすへし。太刀をはしのふにとらすぞ。よろひは毛きれしたりとも。わのとつてきて。次信にそうたと思ふへし。かまへて忠信よ。つき信かうき世にあるやうに。心つかひを仕りてはうはいにくまれ申なぬ。御暇申て我か君。いとま申て傍輩たちあら名。こりおしの。忠信。高声に念仏。十篇計となへしが。かすかなるこゑをあげ。むさし殿はいづくにそ。おとくの。忠信に目かけてたへと(27ウ)いひ捨て。おしかるへしおしむへし。朝の露ときえにけり。上下万民。おしなへてあは。れとはぬ。人そなき。「コトハ」判官ふひんにおほしめし。唯今もけうやうしたけれとも。屋平家まけ軍にてある間。もし夜討にやあがらんと。要害かまへ。用心隙もまします。明けは志度の道場より聖をしやうし奉り。次信かけうやうし給ふ。むさんや彼者。度々所望せし事をかなへぬ事のむさんさよ。所望といつは別の子細にて候らはす。あれにたつたる太夫(28オ)

黒か事。一とせ義経奥州に下り。佐藤秀平催し。十万余騎に到着付。

上洛のとき。秀平。大黒小黒とて二疋の馬を秘蔵してもつ。こくろといつしは。あの馬よりも長はつくんにのほつて候らひしかとも。心をくれたるによつて小黒と名つく。大黒とはあの馬の事さうよ。秀平申せしは。それ弓取の戦場にのそんで。高名を究る事。馬物の具にしくはなし。是に召れ候らひて。御代をひらかせ給へとて。物の具一両おしそへ。なにかしに(28ウ)

えさす。某か手にわたつて乗心よし。足のはやき事は飛鳥のことし。楽の名によそへて青海波と名をつくる。鎌倉殿のいけつきするすみ。かばとのく虎搗毛。なにかしかせいかいはとて。和朝に上こす馬はなし。元暦元年正月廿日に宇治川渡し。同じき二月七日に一の谷てつかひか峯を落し。平家のくびをおほくとつて王地を渡し。院の御目に懸り。太輔の判官になされ申とき。馬も。源氏に吉事の馬なれはとて太夫黒にふする(29オ)

「サシイロ」されは延喜の帝の御ときは。白鷺をいたきとつて。五位になされしたためしこそ候らへ。馬の太夫司は。ためしまれなりとて太夫黒にそ。ふせられける。「コトハ」東寺四塚の辺にて。むさんやかのもの。なにかしかあたりへ。馬かつしくとあゆませよせ。あつはれ御馬候や。おくにて見まいらせしよりも。長はつくんにのほつて候や。あはれ此御馬を給はり。君のまつさきかけ。討死せんする命は。露ちり程おしからしと。度々所望せしかとも。いやく。次信(29ウ)

におとらぬ忠の武士多し。自余のうらみをきじと思ひてとらせぬ事の

むさんさよ 「クトキ」最後なれば忠信ひきたうこそ思ふらめ。よし
く おんを見ておんの知らざるをは。鬼畜木石にたとへ。たり。いて
く よし経も太夫黒ひいて。命のおんをほうせんとて。忝も御手を太
夫黒か水つきにかけさせ給ひ。次信か死骸のまはりをかなた。こなた
へ引まはし。其後忠信たまはれり 「フシ同」実や次信。此世にて。
ほしゅくと。思ひしねんや通しけん。馬は(30オ)

北のものなれば。ほくふうに。いはいてしらあわかうで。終にむなし
くなりけり。いげのものはを見て。まさしく次信給はりて。迷途ま
て。のるよとはいはぬもの。こそなかりけれ 「クセ」つたへきく太
国の。太宗皇帝は。ひけを切てはいにやき。こうしんにあたへたひに
き。疵をいやしちをしめし。せいしをなてしかばめいは。ぎによつて
かろし命はおんのためにつかはす。いかにも其身のころさるゝ事をい
たむまし。本朝の義経は。忠ある侍に太夫くろをひかれ(30ウ)

けり 「片ツメ同」是を見る人々いよくいさみあるへしとかんせぬ
人はなかりけり。あくる日の合戦に源氏七騎に討なされ。しとの浦と
かや。松かはなといふ所に。陣取てまします。熊野の別当たんそう一
千余騎のせいにて。みかたにまいらるゝ。源氏の御勢一千余騎になり
給ひ。おこる平家を。ことゆへなくたいらけ三じゆのじんぎゆへなく
都へかへし給ひけり。おとくの忠信。吉野山まで御伴す。よし野山
にて。大衆達の。心かはりの有し時。そのとき忠信。判官づかさとき
せ(31オ)

ながを申たまはり一人嶺にとままり。判官殿と名のり。よし野法師を

待うけ。さんく合戦し。そこにもうたれずし。みやこへのほつ
て。腹切てむなくなるその人々の事ならば。今生の対面は思ひもよ
らぬ事なり念仏し給へとて。むさし殿か笈より。次信のかた見。忠信
のかたみを。取出し候らひて尼公に是をたてまつる。にこうかた見を
取上。顔にあて胸にあてりうていこかれかなしむ。何にたとへんかた
そなき。判官御覽して。こゝろ(31ウ)

つくしにいづまで。つむむへきとおほしめされける間。是こそいにし
への。源九郎よし経と。御名のりありければ。尼公うけたまはり子と
もか事は。さてをきぬ三代お・おんの。君をおかみ申こそなけきの中
のよろこひとよろこぶ事はかきりなし。これにしはらく。とめ申て。
平泉へ。使をたてにけり。秀平よろこぶで。ちやくし錦戸。次男安平
をさきとし三千余騎のせいにて。御むかひに参り。ひらいつみへ。入
申ころも川高館と申ところ(32オ)

。新造に御所を建柳の御所と申て。あいたさかた。つがるかつふそと
のうら。ひわうばんのかまへていつきかしつき申すかの秀平か心中を
は。きせん上下おしなへ。かんせぬ人はなかりけり(32ウ)

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(毛)毛利家本、(内)内閣
文庫本、(打)打波家本、(松)松村本、(京)京都大学一本、(直)直
熊本

- 1オ ○日は陽国を―(打) いかに武蔵日はやうこくを、(直) 日わやう、○いつくにても―(京) いづくゑもたちこえ家のつくりの○しかるへからん所にて―(毛) ナシ、(直) しかるへきところ
に ○むさし―(直) 弁慶
- 3ウ ○妻戸かなる―(京) 妻戸がきりゝとなるふしぎやとおもひ
- 4オ ○山ふしの姿をまなひ―(京) ナシ
- 4ウ ○下れかし……肩にもせて下らすし―(打) くだらすし
- 5オ ○喃いかに―(直) 尼公涙をとゝめさせたまいなういかに ○余りに―他本ナシ ○ふつつと―(毛・直) ナシ ○御宿は叶ひさふらふまし―(直) ナシ ○武蔵聞て―(打・直) 弁慶きいて
○尼公の―(毛・内・松・直) ナシ
- 5ウ ○尤御道理―(毛・内・打・直・京) ナシ
- 6オ ○こなたへ―(松) 見ぐるしくは候へどもこなたへ ○中のでいへ―(毛) 山伏達を ○人の親の―(内) 人の親のならひにて
- 6ウ ○夢はかり―(京) しろしめされさふらはど夢ばかり ○むさし聞て―(毛・内・松・直) 弁慶聞て ○山ふしの名をは―(毛・内・松・直) 名をは ○きいたりとも存せず―(京) 今こそ聞て候へ
- 7オ ○佐藤秀平催し―(京) ナシ
- 7ウ ○あのむかひに見えたる―(毛・内・打・松・直) 向に見えてさむらう ○いかに兄弟よ―(京) いかにかや次信忠信よ ○西国への―(内) これより西国への
- 8オ ○父母をなくさめ申せ―(毛) 候あ
- 8ウ ○力及はず佐藤殿―(京) 佐藤殿御らんじてちからをよばせ給はず ○いかに兄弟よ―(京) ナシ
- 9オ ○ありとしてつて念仏申通れ―(毛) 有るとしれ ○西国かたにて―(毛・内・直・京) 西国にて
- 9ウ ○兄弟か植をきし花園に立出―(京) 二人の者が植をきし花園山に立入 ○明れは次信恋しやくるれば忠信恋しやこひし／＼との給ひし―(毛) (傍書シテ抹消)
- 10オ ○さて定業やきたりけん―(毛) (傍書)、(直) ナシ ○物うさに―(直) かなしさに
- 10ウ ○おかた達か姿をはつく／＼と御覧して―(直) ナシ ○三月の余波には……卯の花計のこりけり―(毛) (傍書)、(内・打・直) ナシ
- 11ウ ○さる間―(毛・打・直・京) ナシ、(内) 其後 ○判官御座をたゝせ給ひ弁慶を―(京) はうぐわんむさしを ○よしつねとは―(京) はうぐわんとは ○最後所をも―(毛・内・打・直) 最後の跡を ○よそなから―(他本) よそ／＼なから ○なくさめよかし―(毛・内・打・松・直) なくさめてたべ、(京) 心をもなくさめてたべ ○武蔵承り―(毛・内・打・直) 弁慶承り
- 12オ ○語て聞せなくさめうするにて候とて―(毛) 語つてきかせ申さんとて ○座しきの興を催し―(毛・直) ナシ ○やあいたはしや候―(直) ナシ

12ウ ○かれらかー(松) こどもが ○人にもきせかけてをきー

(毛) ナシ

13オ ○さる間武蔵坊弁慶はー(毛) 扱も弁慶は、(内・直) 其後むさ

し坊弁慶は、(京) 去間弁慶は ○始より終までー(毛・直) ナシ

○いつなるらんー(他本) ナシ

13ウ ○二人は見んと云三人はー(内・打・京) 三人は見んといふ二

人は ○かやうの事をー(京) 人は何ともいはいへかやうの事

を ○熊野に罷かへりー(毛) ナシ ○平家かたよりもー(京)

御座舟のなかよりも ○さゝめかいてー(直) ナシ

14オ ○精好のー(京) ナシ ○しめのせきつるかけさせー(京) ナ

シ

15オ ○五枚甲にくわかたうつてー(京) 三枚甲に

15ウ ○候らへ共いつくとー(他本) 候へどもなかさしを一筋奉んに

いつくと ○おほしめしー(毛・内・打・直・京) やおほしけん

○ぬきー(他本) ぬきいで

16オ ○矢つほはー(他本) やころは

18オ ○打立てー(他本) うちあげて

18ウ ○不便におほしめしー(京) ナシ ○なくさめよかしー(毛・

内・打・直・京) よかし ○あらむさんや次信ー(直) ナシ ○

甲のー(直) むさんやつきのふが甲の ○次信かくび取てー

(京) いかさま次信がくひとつて ○舟よりもー(毛・内) 船よ

り下に、(打) 云まゝに舟よりも、(直) 云まゝに舟より下に ○

忠信是を見ていや／＼ー(毛・内・打・松・直) 忠信此由みるよ

りも、(京) おと／＼の忠信此よしを見るよりもいや／＼

19オ ○とつてからと打つかひー(直) ナシ ○いきみにいさんてお

りたつたる菊王丸かー(京) あらむさんや菊王か勇に忠んており

たつたる ○是を見てー(毛・内・打・直) 此よしみるよりも、

(京) このよしを見るよりも如何様 ○云まゝにー(毛・内・打

・京) ナシ、(直) 思い ○わつはかくひをー(打・京) いや／＼

わつはかくひを

19ウ ○舟よりもとんでおりー(直) 舟より下にとんでをり ○中と

をしてはー(他本) とをされ候ては

20オ ○此人々をさきとしてー(直) ナシ

21オ ○平家の軍兵とも弁慶か懸るときに中をあけてとをしけりー

(直) ナシ

22ウ ○奥州の忠信はいつくに有そー(京) 此辺のあふしうの忠信や

ある ○いそいてくしてー(毛・内・打・京) ぐして ○承ると

申てー(京) 武蔵承りをつとこたへて ○いそいて御参りー

(京) をまいり ○君の御前に畏るー(直) 御前をさしてまいる

23オ ○たゞ信承りー(京) ナシ ○あふー(打) 判官きこしめされ

てあう、(直) 判官聞召れて ○さそあるらんー(毛・内・打・直

・京) 実／＼それはさぞ有らん ○いそひでくして参れー(直)

ネシ、(京) いそいで尋てまいれ ○今生にもあらはとふへ

24オ ○いかに次信―(京) ナシ ○御手は大事に候か心は何とましますそ―(毛・内・打・松・直) 心は何とましますぞ御手は大事に候か、(京) 御手は大事にましますか心は何とましますぞ

24ウ ○いかに―と申―(直) いかに―と申れども、(京) いか

に―と申時 ○次信きいて―(毛) むざんや次信、(内・打・松

・京) 荒むざんやつきのふ、(直) ナシ ○なんぎに―(他本) い

かほどに ○と申次信きいて―(京) ナシ ○太将の―(京) ナ

シ

25ウ ○近ふかけとふへきしさいあり承ると申て―(直) ちかうかけ

との御説にて ○太将の―(毛・内・松) 判官の、(打・直) 判官

は、(京) 判官 ○とつて―(他本) ナシ ○如何に次信よ―

(京) ナシ ○今生に―(他本) ナシ ○思ひをく事のあらは

たゝ今申せ―(直) ナシ

26オ ○あらゝかなること多をあげ―(直) ナシ ○弓手の眼を―(毛

・内) ナシ、(打) (傍書)

26ウ ○折かけ―(他本) ナシ

28オ ○判官―(京) 大将 ○明ければ志度の道場より―(毛) 天明

ければ(傍書) 讃岐の国しどの道場の、(内・打) 明ければ讃岐の

国しどのたうちやうの、(松・直・京) あげければしどの道場の

○いつは―(他本) 申すに ○あれにたつたる―(他本) あれ

に候

28ウ ○物の具一両おしそへ―(毛) ナシ

29ウ ○かのもの―(他本) 次信 ○おしからしと―(京) おしから

ず此御馬をたまはらでと

31オ ○ゆへなく都へ―(他本) ことゆへなく都へ

31ウ ○一人嶺にとゝまり―(松) ナシ